

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): Nong Zhigao   Zhuang   China   Song dynasty   ethnic hero 作成者: 塚田, 誠之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00005972">https://doi.org/10.15021/00005972</a>

書評論文

壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点

塚田 誠之\*

Trends and Problems in Studies of Nong Zhigao, a Zhuang “Ethnic Hero”

Shigeyuki Tsukada

本稿では、宋朝、11世紀半に大規模な蜂起を起こし、チワン（壮）族の「民族英雄」とされている歴史的人物儂智高（1025-1055?）に関する、現代中国における研究動向を検討した。あわせて、従来研究されてこなかった諸問題をも検討した。

1950年代後半から1960年代に、マルクス主義的發展段階論にそった論争が展開された。ついで1979年の中越戦争以降、儂智高の国籍問題が論じられ、儂智高中国人説が有力となった。1990年代後半、「民族英雄」としての評価が出現し、2000年以降定着した。愛国主義思想の普及にともない儂智高の「愛国者」としての位置付けが定着した。また、雲南や東南アジア大陸部に研究の地域的な広がりが見られるようになった。さらに、メディアが論争に参入した。2000年代、ウェブサイトの普及により一般の市民を巻き込んだ、新たな論争が展開されるようになった。地方からの論評が続々と出現し研究の裾野が広がった。

儂智高に関する再解釈が現代中国では絶えず行われ続けてきた。儂智高をめぐる研究には時代の風潮が映し出されてきたのである。

This article analyzes trends in current Chinese studies on Nong Zhigao (1025-1055?), who led a revolt against the Song dynasty during the mid-11<sup>th</sup> century. It also takes up several problems not traditionally researched.

Starting in the late 1950's and into the 1960's, discussions primarily centered on the representation of Nong's rebellion as a developmental stage of

\*国立民族学博物館研究戦略センター

**Key Words** : Nong Zhigao, Zhuang, China, Song dynasty, ethnic hero

**キーワード** : 儂智高, チワン（壮）族, 中国, 宋代, 民族英雄

Marxism. After the Sino-Vietnamese War of 1979, though, the debate shifted to a focus on the issue of his nationality, with the theory becoming prevalent that he was Chinese. In the late 1990's, however, it was proposed that he was instead an ethnic hero of the Zhuang, a minority in China, and that opinion became reinforced after the year 2000. The positioning of Nong Zhigao as a patriot thus strengthened with the spread of ethnic nationalism in China. In addition, the debate spread to China's Yunnan Province and continental Southeast Asia, with the media also participating.

In the first decade of the 21<sup>st</sup> century, websites emerged that saw the general public enter the debate. Comments successively appeared from various regions, broadening the debate.

In China today, various interpretations have already been developed concerning Nong's life, and the trend seems to be for new ones still to emerge.

1 はじめに	3.4 1990年代後半以降2000年代前半まで
2 日本における先行研究の概要	3.5 近年における動向
2.1 歴史学的研究	4 分析されてこなかった問題点
2.2 人類学的研究	4.1 儂智高軍の問題点
3 儂智高に関する記述の変遷	4.2 儂智高の経済基盤
3.1 1949年以前	4.3 羈縻州対宋朝の権利義務関係の制度的分析
3.2 1950～60年代	
3.3 中越戦争と1980年代	5 整理

## 1 はじめに

歴史的人物に関する評価については、その時代の政治的な背景や社会の風潮、国際状況など諸条件に十分に注意を払って行われる必要がある。なぜなら、同じ史料を用いて同じ人物を描いても、諸条件の相違によって全く異なる評価がなされる場合がしばしば見られるからである。その場合、学者の置かれた立場の相違も重要な意味を持っている。

宋代に大規模な蜂起を起し、現在の中国でチワン（壮）族の「民族英雄」とされている宋代の歴史的人物儂智高（1025～1055?）は、従来、とくに人民共和国成立後

の中国において、他の歴史的人物の場合を遥かに超える膨大な研究が積み重ねられてきた。その事跡は「千年の謎」とされ、壮族史を理解するためには不可欠であるとされ（羅 2012）、多くの学者がその半生を尽くして「謎」の解明を目指してきた。広西壮族自治区政府の肝入りで、「壮学叢書」<sup>1)</sup>のうちの一冊として范宏貴主編『儂智高研究資料集』（2005）が刊行され、重要な史料、碑文、族譜、調査資料、さらに主に人民共和国以降に中国で公表された論文 87 本が再録された。こうした大部の資料・論文集が刊行されたことの背景に、広西当局がいかに儂智高を重視しているか、また儂智高がいかに論争的にされてきたかを容易に推測することができる。

本稿の目的は、儂智高に関する従来の諸研究、とくに中国でのそれを批判的に検討し、あわせて、従来研究されてこなかった問題点について分析を試みるものである。

儂智高は宋の仁宗の皇祐 4 年（1052）、大規模な蜂起を起こし、一時的に広西・広東の地を占拠したことで知られる。儂智高は現在の中国では壮族とされている。壮族は人口 1,679 万人（2010 年）を有し中国の少数民族のうち最大規模である。言語はタイ系で、言語や習俗など一定程度の文化的共通性が見られるものの、地域によって異なる諸集団が人民共和国成立後に政府によって民族として統合されたものである（塚田 2000）。本稿では、儂智高の蜂起に対する諸解釈の分析を通じて、現代中国における歴史叙述の一面を浮き彫りにしたい<sup>2)</sup>。

## 2 日本における先行研究の概要

### 2.1 歴史学的研究

儂智高の「叛乱」の経緯を日本で最初に検討したのが河原正博（河原 1959）である。河原によると、儂智高は広源州を本拠地としたが、その地は、宋と安南（ベトナム李朝、「交趾」）との二大勢力の間に介在し、両勢力の影響が及んでいた。広源州とは、現在のベトナムのカオバン（Cao Bang, 高平）を中心とした地域で、さらにその中心はクワンユエン（Quang Huyen, 広淵）である。儂氏は宋代になって朝貢するようになったが、そこに安南李朝が勃興してくる。天聖 7 年（1029）、「酋領」の儂存福は安南李朝の圧力を逃れようと宋に帰附しようとしたが宋が許さず、「長生国」を建国した。しかし、宝元 2 年（1039）、李朝に討伐され殺されるに至った。その子儂智高は李朝から広源州一帯の領有を認められたが、李朝に反逆し、皇祐元年（1049）、儂猶州に拠り「大曆国」を建国し、ついで安徳州に拠り「南天国」を建国した。宋朝

への朝貢・任官・互市の形でたびたび内属（＝内附：筆者）を願ったが、宋朝は李朝と紛争が生じるのを恐れて内属を拒絶した。儂智高はここに至って宋の領土に攻め入り、皇祐4年（1052）、邕州を陥落させて「大南国」を建てた。その後、広州へ進撃し57日間広州を包囲したが失敗し、邕州に後退した。翌皇祐5年、宋朝が派遣した狄青率いる宋軍に敗れ大理へ逃亡し、消息を絶った。

河原は、儂智高の蜂起の原因について、父の儂存福の代からの蜂起をも含む「広源蛮」の蜂起は、安南李朝の勃興によって惹起し、宋朝との中間地帯に対する李朝勢力の波及がもたらしたもので、また、安南に対する宋朝の消極策によるものとしている。

河原の研究は、儂智高の蜂起に関する研究の嚆矢として、蜂起の経緯を、ベトナム李朝・宋朝との関わりに留意して史料に基づいて明らかにした点で評価される。しかし、儂智高が大規模な蜂起を起し得た社会・経済的背景にはふれられていない<sup>3)</sup>。

ついで小川博は、学術誌『中国大陸古文化研究』第1号（1965年）から第4号（1967年）にかけて、儂智高の蜂起の経緯に関する論文を4回に分けて連載した。しかし、史料として『宋会要輯稿』を使用している以外に、内容的には先の河原（1959）以上の新たな知見は示されていない<sup>4)</sup>。

岡田宏二（1979）は、儂智高をめぐる政治的社会的問題、民族問題を検討した。その中で、「広源州蛮」儂氏が、遼・西夏建国などの周辺諸民族の影響を受けて、皇帝号、中国式官名を採用したことから、「民族的に覚醒し、独立国家建設の野望を実現させようとした」と指摘した。また、「反乱」の首謀者として広州進士黄瑋・黄師宓が関わっていることから、殿試落第秀才の「外国亡命」が当時流行したことを指摘している。宋朝に対して不満を持つ貧困な民衆が「反乱」に参加した点で、国家に対する農民闘争の一環として位置付けている。民族問題としては、現在は儂氏・黄氏は壮族とされているが、唐宋時代は「獠」、明清には「狼」と表記され、また、宋代の「俚人」の系統をも引くことから壮族の「複合性」を指摘している。問題点は、独自の史料の提示、独自の見解が不足している点である。たとえば「民族的覚醒」が当時見られたというがその史料的裏付けはない。また、民族名称から見た「複合性」は、白鳥芳郎の西南中国の複合的な民族構成に注目した研究を踏襲し応用したものであるよう見受けられる。

谷口房男（1975）は、儂智高の蜂起と唐代広西の「西原蛮」を鎮圧した際に王朝側が現地に建てたという「平蛮頌」について、後世に古籍に引用された碑文を手掛かりに、二つの蜂起の鎮圧過程を検討し、その碑が「漢民族王朝体制」の威令を宣示し、「叛乱者」に対しては「討伐」をもって対応する姿勢を示す、懐柔・討伐の二面的な

意図で建てられたことを指摘している。中国王朝側の統治の視点から検討されており、また儂智高蜂起に関しては新たな知見は示されていない。

筆者（塚田 1983）は、唐宋時代における広西左・右江流域諸集団の相互関係、経済的基盤、社会構造等について、新たな史料を発掘し知見を披瀝した。その問題意識は、儂智高蜂起のみならず唐宋時代を通じて当該地域の動態を検討し、当該社会の経済基盤や宋朝との関係史を含めた広い視野からの検討をすることにあった。内容については後述するが、たとえば経済基盤について（河原 1959）では広源州における金の産出を指摘しているが、塚田（1983）は、南宋初期における当該地域をめぐる交易網の形成を新たな史料を挙げて示した。これ以降、日本の史学界では儂智高問題に関する専論は見られない。

## 2.2 人類学的研究

次に人類学的立場からの儂智高研究について、伊藤正子による、儂智高の「語り方」について、中越両国が自国史のなかに儂智高をどのように位置付けようとしているのかを検討した研究が注目される（伊藤 2002）。

伊藤によると、中越両国が社会主義の兄弟国同士の関係を維持していた時期においては、ともに封建王朝を「悪」の側に置き儂智高を「民族の英雄」と位置付けをしていた。

後に両国の関係の悪化後において儂智高の語り方に差異が見られるようになった。すなわち、中国では、儂智高が封建王朝の宋朝と対立したこと、儂智高がベトナムと戦ったという点から高く評価されるようになった。また、国家の防衛という目標を強化する言説として儂智高の蜂起の意義を強調することに成功した。さらに、壮族の場合、歴史の評価、記録をする人材に恵まれ、壮族知識人自身の語りが公定の語りとなり得る条件をもっていること、儂智高伝説自体は広西のごく一部に限られているものの、「民族の英雄」に祀りあげられている点から、地方政府や壮族知識人にとって儂智高が壮族のシンボルとして重要であること、人民共和国の民族政策として、壮族を国民として一つにまとめていくために、シンボルとして「民族の英雄」というイメージを創り出そうとしたことが指摘されている。

他方、ベトナム側では異なる事情が見られたという。すなわち、儂智高は中国王朝ともベトナム王朝とも戦い中国に服属を願ったので、ベトナムの「英雄」になりにくいこと、タイ族・ヌン族が中心となって自分たちの歴史を記述できるような体制がないことが指摘されている。

中国とベトナムの自国史への農智高の位置付けに関して、大筋において伊藤の指摘は的を得ている。ただし、中国側の解釈については、1940年代から人民共和国成立を経て最近に至るまで長期的なタイム・スパンを設けて、時代ごとの変遷についてより掘り下げた検討が必要であろう。たとえば、中国で人民共和国成立の当初から知識人がこぞって一貫して農智高を「民族英雄」として位置付けていたとは考え難く、「民族英雄」としての評価がいつ、いかなる過程を経て創出されてきたのか、解釈をする主体である知識人の立場による相違に留意しつつ、時代の風潮による位置付けの変化を考える必要がある。また、伊藤の論文が公表された後の時代において状況に大きな変化が生じているよう予測される。

さらに、農智高について、従来、中国では分析されてこなかった側面が少なくない。たとえば、先にふれた農智高をめぐる民族間関係のありようや経済的基盤は中国では近年になってようやく研究が着手され始めた。

本稿では、こうした問題点、すなわち諸論文を批判的に検討することを通して中国における農智高に対する解釈の時代に応じた変化について検討し、さらに従来分析がなされずに近年研究が開始されている点を検討したい。

農智高に関する膨大な論文の多くは、先述の范宏貴主編『農智高研究資料集』(2005)に再録されている。それは農智高関連の論文を発掘する際に網羅的な文献目録としても重要な手がかりになる点でも意義が大きい。

また、農智高研究の動向を紹介した論文として羅彩娟(2009)がある。そこでは、農智高の「国籍」、出生地、敗戦後の行方、「起義」の性質と意義、の各項目を挙げて、項目ごとに主要論文が紹介されている。ただし、羅列的な紹介にとどまっており、問題点を挙げた上での批判的な検討はなされていない。くわえて河原(1959)をはじめとする日本での研究には全くふれていない。

### 3 農智高に関する記述の変遷

#### 3.1 1949年以前

まず、1949年以前の民国期の農智高関係の論文を一瞥しよう。この時期の論文は中国では研究者にほとんど引用されていない<sup>5)</sup>。

劉介(錫藩)の『嶺表紀蛮』(1934)は、当時の広西の諸民族の歴史と社会文化を初めて幅広く扱った研究であり、農智高研究の面でも嚆矢である。そこでは広西の

「蛮」のうち8割が「獠」であること(11頁)、ただし「華夷の界限」がほとんど消滅し、本来の言語あるいは遺俗を保持していなければほとんどそれが獠であることはわからないこと、山奥の僻県に古式を維持するものが人口の10分の1、2のみであるとされている(19頁)。「獠人」には狼、獠などが含まれ、儂智高を「獠族」としている。本書が儂智高を現在の壮族とした最初の研究である。なお、劉は土司土官を「漢人」としている。土司の起源について、宋将狄青が儂智高軍を鎮圧した後に置かれ、多くは漢人が(その功で)任じられたとする。

狄青に従軍して儂智高を鎮圧し広西に移住したという伝承の真偽は、中国では長く問題にされず、日本で検討が進められた。その真偽について、河原(1944)によると、左・右江の首領はその始遷祖が宋代に南遷した漢人という世系を持つが、黄・趙(儂)・韋・梁・張等の姓は狄青の南征以前に見られるので、世系は作為であって、実はそれ以前より勢力を有していた首領の後裔であるとしている。牧野巽(1985)は、河原説に同意しつつも、狄青に従軍して山東から移住した伝承は、「平話」方言を話す漢人から「タイ族の土酋」に「マイグレートした」ものとしている。さらに松本光太郎(1990)が、現在の壮族の多くが狄青従軍移住伝説を持つことを指摘している<sup>6)</sup>。

なお、劉(1940)は、土官を(狄青に従軍して儂智高鎮圧に移住した移民と僮族との)「混血族」とする。

徐松石(1945)は、儂智高を広西西南部の「僮人」とし、そのうえで、智高が宋朝軍に敗れて大理国に逃れ、そこで大理に殺されたこと、しかしその軍隊で雲南に移住したものが多く、元江一带、「十二版纳」、さらにはタイ国北部に再移住し地元民に融合したことを指摘している。

莫剣(1948)は、儂智高を「蛮王」とするが、民族的には「儂族」であるとしている。当時「特種民族」(苗僮儂等族)が広西各県に散居しており、儂智高軍に従軍したとしている。儂智高の蜂起については、「民族の生存闘争」「民族の革命運動」としている<sup>7)</sup>。

覃樹冠(1949)は、儂智高の「反叛」の経過と政治的背景を論じている。儂智高が「交趾人」の「虐待」・統治から「独立を求めて宋朝の援護を得るべく」帰附を願ったが、「宋朝士大夫の反対」により失敗したとしている。この時点で、儂智高の蜂起の大まかな経過が指摘されたのであるが、後世の学者からは無視されてしまっている。覃は、儂智高の民族的帰属については「西南土著民族の一つ」の「南蛮」としか明記していないが、「西南の高山叢嶺に居住し900年来漢人の圧迫と虐殺に遭ってきた」「苗蛮」であることを示唆している。当時、山岳地域に居住する僮族の一部が「特種



民族」とされたものの、僮族に独自の民族としての位置付けがなされなかった風潮があった。

ト松（1949）は、農智高の民族的帰属について、土著の「童族」としている。童族は、広西を「大本営」とし、7,800万人は下らない。広大で歴史の悠久な童族について、「朦朧とした大漢族的観念」を以て特有の文化を発展させずに抹殺することはたいへん惜しいこと、童族の子孫なのにそのことを承認しない人は自分の祖先の由来を知り、その民族の文化を研究するべきであることを指摘している。「童」の表記としては、ケモノ偏を付けることを末尾に指摘している<sup>8)</sup>。トの研究は、農智高については童族に帰属することを指摘するにとどまっているが、1949年3月の段階で、大多数の僮族は、「大漢族的観念」に染まり、僮族であることを自ら承認しない状態が確かにあったこと、トに代表される一部の知識人が「童族」が大規模で特有の文化を持つ民族であること、その研究が必要であることを認識していた点は壮族史研究において重要である<sup>9)</sup>。当時の研究では後述する農智高の「国籍」については明記されておらず、「広西の」僮（「僮」）族、農（獯）族、あるいは特種民族とされているのみである。当時の中国が仏印と目立った衝突を起していないという国際関係の影響があるであろうが、農智高の出自を中国領以外の地域とする発想はまだ見られない。

以上を要するに、民国期末期において、農智高は僮族、あるいは「苗蛮」とされていたが、農智高僮族説、農智高の蜂起の経緯に関する論文がすでに出現していたのである。

### 3.2 1950～60年代<sup>10)</sup>

1952年12月10日、広西省西部を以て「桂西僮族自治区」が建設された。その際に、自治区民族事務委員会副主任張景寧が、僮族の文化や歴史を記述した文章において、僮族の「英雄人物」として農智高を挙げた（『広西日報』1952年11月5日）。これが、農智高が「英雄」視された最初の記述である。

ついで黄現璠（1957）は僮族初めての通史である『広西僮族簡史』において、「僮族領袖」農智高が宋朝統治者の圧制に反抗したこと、後に僮族人民は農智高に対する敬愛を強め、武鳴・上思・養利・隆山・靖西等、至るところに祖墳・故事伝承があることを指摘している<sup>11)</sup>。黄は自身が僮族で、僮族中心主義的な点が批判されて1957年7月には反右派闘争で右派とされた人物（塚田2005）である。

南躍（1959）によると、1959年5月6日、広西僮族自治区<sup>12)</sup>民族事務委员会主任梁華新が、農智高の挙兵の性質に関する学術討論会を実施した。この討論会に17機

関のべ88人が参加し、26人が発表し、壁新聞19枚を作成した。儂智高については、大多数の者が拳兵の正義性を肯定し、否定する者は少数であった。

儂智高拳兵を肯定する「肯定論」者の主要な論点は、当時儂族地区は封建社会に入っており、儂智高は宋朝封建統治者と闘争をしたこと、北宋時代は階級矛盾が激化し、北方（の遼・西夏）に対して「投降」「妥協」をし、南方に対して圧迫と掠奪を行ったことである。

封建制や奴隸制は言うまでもなく、マルクス主義的進化論的な生産様式を基準とする発展段階で、当時の中国では歴史の理解に重要な枠組みとして位置付けられていたのである。

肯定論で注意したいのは、宋朝に対する批判、中国の領土統一に関する論点が当時から登場している点である。儂智高が政権を樹立して宋朝に対抗したことを首肯し、しかも「封建割拠」ではなく祖国の統一を破壊していないという論理である。対宋朝批判、割拠問題は以降もたびたび問題にされる。ついで、儂智高の蜂起は失敗したが宋朝から譲歩を引き出したという論点も出現している。「譲歩」の内容は、軍屯の拡大、農業生産力の拡大、賦税の減免である。儂智高の場合に限らず、大赦、賦税減免はどの「叛乱」にも事後措置として付き物であろうが、具体的な屯軍の兵士数や賦税額の明記された史料が、宋の正州である広南西路と羈縻州への処置を分けた上で提示されていない点が問題であろう。儂智高の本拠地広源州は、ゆるやかな間接統治下に置かれた羈縻州であって正式な領土の正州ではない。当時の軍屯設置について中越国境地域の羈縻州における史料は管見の限り見られない。賦税課徴については、南宋初期・高宗期（後述）において史料が見られるが、儂智高の蜂起後に賦税が賦課されていたかは疑問である。

儂智高の拳兵について「否定論」者の主要な論点は、当時壮族地区は奴隸社会の段階にあって、社会の主要矛盾は奴隸と奴隸主との矛盾であること（したがって奴隸が直接宋朝に反抗するわけではない）、儂智高軍には人民が志願して参軍したのではなく、（奴隸主である）儂智高が人民をさらって奴隸として加えたこと、それゆえ戦争は非正義性のもので、それゆえ儂智高軍は瓦解したこと、さらに儂智高の「封建割拠」が祖国の統一と各民族の団結に不利であったこと、くわえて当時の儂智高の本拠地広源州は交趾に属しており、交趾の搾取を受け、宋朝の搾取を受けていないことが挙げられている。

「否定論」で注意したいのは、儂智高の封建割拠が奴隸制論と結びつきがちな点である。宋朝領土は封建制にあるので、儂智高の領土である羈縻州が封建制の前段階で

ある奴隸制であれば、宋朝領土を占拠すると「割拠」して宋とは別個の政権を樹立したとして理解しやすいからであろうと思われる。また、ここではベトナム李朝の儂智高に対する圧迫・搾取が拳兵の原因として挙げられているが、この点は以降も繰り返し問題にされる論点である。

以上は南躍による学会発表の整理である。以降、肯定論、否定論それぞれの論者による主張は論文として公表されていくことになる。以下に1960年代前半に公表された論文を見ていこう。

陳維剛・李干芬・李維信（1961）は、広源州が奴隸制段階にあったとする立場である。儂智高の拳兵の動機は、国を建てて王を称することにあつたので、統治階級の間の矛盾の衝突であること、また原因の一つに、宋朝が儂智高の自身の地位を高めようとする要求を呑まなかったことが挙げられること、そして儂智高の拳兵は、遅れた奴隸制をもって宋の先進的な封建制度に反対したのであり、それゆえに歴史上の「逆流」であること、さらに奴隸制段階ゆえ、儂智高は祖国の領土から分裂して別に奴隸制国家を樹立しようとしたことが論点である。さらに拳兵後の宋朝の政策が「祖国の統一を固め辺防力を強めた」ことを評価している。

ここで注意したいのは、奴隸制段階にあるとして儂智高の蜂起に否定的で、祖国から分裂し別の国家を建てようとした評価をしても、蜂起後の宋朝の政策によって国家の統一の強化につながっているという見解である。また、儂智高蜂起鎮圧後に軍屯人数の増加や中原漢族の南下人数が増加し、壮・漢人民間の交流関係が一層頻繁になったことをも付け加えている。現実の国家の統一、民族間の団結の維持を歴史に投影しつつもそれを何らかの形で主張していく必要性が否定論者側にもあったように思われる。

王克栄・邱鍾侖（1961）も奴隸制論に立っている。儂智高拳兵は掠奪的な非正義の戦争で、奴隸主の階級利益を代表して奴隸制の拡大・強化を企図して反宋の掠奪戦争を起こしたこと、奴隸主（儂智高）と奴隸（壮族人民）との矛盾が主要矛盾で、壮族人民と宋朝の矛盾は間接的で二次的矛盾であることが論点である。

これらの奴隸制論に立つ論文を見ると、当時は儂智高に対して否定的で宋朝に対して肯定的な見方もできたのであり、必ずしも伊藤（2002）の言うように儂智高を「民族英雄」として祭り上げ宋朝を「悪」とする論調ではなかった。陳・李・李（1961）によると、儂智高の拳兵は「甚だしい場合にはある者は侵宋戦争として非難」したのである。また、「甚だしい場合にはある者は儂智高を民族英雄として称え」ていることが指摘されており、名指しがされていないが「民族英雄」としてすでに位

置ける者が登場していたことが窺われる。しかし当時はそのような位置付けはまだ一般的でなかったのである。

なお、前掲のように分裂割拠説は奴隸制論と結びつきがちである<sup>13)</sup>。またベトナム李朝の圧迫が強調されがちで、陳・李・李（1961）によると、「圧迫された広大な僮族人民と交趾李朝政権との矛盾」が指摘されている。

陳・李・李（1961）の否定論に対して反論を展開したのが肯定論・封建制段階説に立つ范宏貴（1961）である。范宏貴は漢族であるが、1950年代から近年に至るまで、広西の民族学の重鎮として長年にわたって第一線で活躍しており、その学問に対する評価が高い。范によると、社会の主要矛盾は、壮族人民と宋朝封建統治階級との階級矛盾・民族矛盾であって、封建社会であっても農奴は圧迫・搾取を受け封建主との間に階級矛盾が存在したとする。また、ベトナム李朝の圧迫をも論じ、交趾統治者は広源州を占拠し宋境を侵略し儂智高を籠絡しようとしたが儂智高は宋朝に帰附しようとし反宋闘争を起こしたことを指摘している。さらに、儂智高の挙兵反宋は、「狭隘な民族闘争」と違い、漢族やその他の各族人民と連合したこと、「祖国の統一を擁護」し、「壮・漢その他の各族人民の交流を進め壮族社会の発展を推進した」ことを指摘している。くわえて、儂智高の戦争は失敗したが宋朝から譲歩を引き出したこと（宋が広南東西路に曲赦、賦税減免政策を行った）を指摘している。以上から范は儂智高の蜂起は「歴史上の逆流」ではなく、進歩的意義を有すると評価をしている。

もう一人、肯定論者・封建制論者を挙げよう。先の黄現璠（1962）は、儂智高の本拠地が奴隸制でなく、南宋期には封建社会に入っていたことを挙げた上で、儂智高の挙兵は正義で、宋朝統治者の対外的屈辱政策、対内的反動政策によるものとして宋朝を批判している。「宋が儂智高の内附の要求を受け入れていれば」「両広（広東・広西：筆者）の辺疆人民が保護されるのみならず、国土を保衛し、中国人民が外国の侵略に反抗する精神を示すに足りた」としている。また、「壮漢人民起義」であること、さらに儂智高が科挙の「会試」（宋代では「殿試」：筆者）に3度落選した<sup>14)</sup>ことも遠因に加えている。

こうした1950年代後半から1960年代初期の儂智高蜂起に対する肯定論・否定論者の論争に対して、中間的な総括をしたのが政府による『僮族簡史』（初稿）（1964: 59-64）である。そこでは儂智高の挙兵反宋の性質として、肯定論、否定論、部分肯定・部分否定論の3つの立場があることを記している。そして、儂智高の戦争は「事後に宋朝が階級矛盾を緩和する改良措置をとり、祖国の南部辺疆への管理と開発の工作を強めた」こと、そのゆえ当時の「社会の進歩と祖国の統一に利があり」、「歴史に

対して一定の推進作用を果たした」ことを指摘した。

その後も、後述するように、儂智高蜂起に対する肯定論・否定論の論争が時に再三生じるようになるが、『壮族簡史』（初稿）は政府の当時の公式の見解を示したものと位置付けられる。

最終的に論争に終止符を打ったのは後に政府の編纂した『壮族簡史』（1980）である。『壮族簡史』の編纂に際して、1978年8月に広西民族研究所が南寧で壮族歴史学術討論会を開催し、『壮族簡史』編纂に際しての若干の問題を討論し、30余人が参加したという。儂智高の国籍問題が議題となり、主要意見は、後に国家民族事務員会政策研究室が記した「儂智高は中国人、不是越南人」という一文と基本的に一致したという。討論会では、歴史分期問題について、奴隸社会の段階を経た議論と奴隸制段階を飛び越えて封建制に入った議論に分かれ、奴隸制の場合、時期の上限・下限問題にも議論があったが、多数の意見を取り入れて、『壮族簡史』では、戦国秦漢から隋唐時代に奴隸制を経たとした（張養吾主編 1993）。

『壮族簡史』（1980: 60-65）によると、儂智高は壮族の「小首領の家庭」に生まれた。儂の反宋戦争を、北宋王朝の残酷な階級圧迫と民族圧迫が生み出した、壮族の歴史上、比較的規模の大きな「民族起義」で、「民族起義」ゆえに「正義の戦争」であるとした。儂智高の蜂起を「民族起義」として位置付けたのは『壮族簡史』（1980）が嚆矢である。また、儂智高軍への漢族の参加にも注意し、「各族人民の団結戦闘」として評価した。発展段階については、奴隸制は戦国末・秦漢～隋唐、封建制は「土官」設立以降とした。この分期方法によると、土官設立は制度史上は儂智高以降の時代になるので、儂智高の蜂起の時代は空白になるが、この点は儂智高時代の段階を明言しないことで解決を図ったのかもしれない。また、（史実は別にして）儂智高の出自を「小首領」と位置付けることで、儂智高と宋朝との階級的な差異を示している。『壮族簡史』（1980）では、さらに儂智高の失敗の原因として、「部隊に厳格な規律がない」こと、強固な「後方」がないことを挙げている。さらに儂智高が広州包圍戦に失敗して邕州に引き返した後、左・右江各峒の勢力の「団結」に注意を払わず、右江36峒の首領が宋朝の利用するところとなったことを挙げている。「規律」「後方」といった近現代の戦法概念を宋代に投影している点で問題があるが、儂智高が（注意を払わなかったかどうかは措くとしても）左・右江の羈縻州の諸勢力を結集し得ずに、宋朝の離間策に遭って敗亡に至ったことは史実であり、この点は儂智高蜂起の際の羈縻州の事情として重要であると思われるので後に詳述する。

以上、1950年代後半から1960年代初期において、儂智高蜂起に対する肯定論・否

定論者の論争がなされ、何れもマルクス主義的進化論的な生産様式を基準とする発展段階論にもとづく位置づけであった。否定論は儂智高の蜂起を以て宋朝とは別の国家を建てる分裂割拠として位置付けた。また、肯定論・否定論に関わらず、国家の統一・領土問題、団結が問題関心とされてきた。肯定論は祖国の統一を擁護し諸民族の交流団結の発展を促進したとする論調であった。否定論者であっても、確かに儂智高は分裂割拠をした点で祖国の統一と諸民族の団結に不利であったものの、蜂起後の宋朝の政策によって国家の統一が保たれ、民族間の交流と団結が強化されたという論点では肯定論者と共通していた。この論争は『僮族簡史』（初稿）（1964）を経て、『壮族簡史』（1980）で一応の終止符が打たれた。

『壮族簡史』（1980）の編纂に際して行われた学術討論会では、儂智高の国籍問題が議論された。そこでの主要意見は、「儂智高は中国人であってベトナム人ではない」ということであった。儂智高の国籍問題が焦点になった契機が1979年に戦端が開かれた中越戦争である。次に中越戦争の勃発で中越間関係の悪化した1980年代の儂智高に関する論争を検討しよう。

### 3.3 中越戦争と1980年代

中越戦争は1979年2月17日に勃発したが、それ以前に1976年にはベトナム南部の華僑の国籍問題をめぐる紛争、1977年にはベトナム北部の国境地帯の華僑の大量追放に発展し、国境での両国兵士の侵入事件がたびたび発生していた<sup>15)</sup>。

『壮族簡史』編纂に際しての若干の問題を討論した際に儂智高の国籍問題について問題になり、中国人説で一致を見た（張養吾主編1993）ことは前掲の通りであるが、1978年にはすでにカンボジアをめぐる対立から両国間の関係は一触険悪な状態に陥ったようである。

この点について范宏貴（1978）は、儂智高の反ベトナム李朝、反宋朝は失敗したが、祖国の領土を防衛する精神は後人の称賛するところとなったこと、儂智高は北宋の領土の広源州を交趾王に渡さなかったことを指摘し、いち早く反ベトナムの旗幟を鮮明にした。ついで、本格的にベトナム批判を行い、儂智高を「中国人」であることを初めて主張したのが韓肇明（1979）である。

韓（1979）によると、儂智高は中国人で、しかも広西の壮族人であるとする。儂智高の挙兵はベトナム李朝の侵略・掠奪に反抗し、祖国の領土の統一を防衛する愛国行動で、儂智高は愛国者であるとする。韓は宋朝の広源州に対する圧迫・搾取をも批判している。また、儂智高の挙兵の直接の原因は、「内附」要求を宋朝が拒んだからと

している。

韓の儂智高を「壮族」とする根拠は、儂智高の後裔「儂人」の活動地域が現在壮族の集居する広西左・右江，雲南文山地区で、儂智高の父はおそらく邕州（現南寧）人、母の阿儂が武勒州人（今の扶綏県とする）、妻は田州人（田陽県）であったとしている。儂智高の父母をはじめ居住地の比定において現在の状況から判断しがちである。しかも、儂智高壮族説は黄現璠（1957）・黄蔵蘇（1958）がすでに（これも確たる根拠はないが）指摘していることである。「愛国行動」「愛国者」に至っては史料的な根拠がなく、当時の中越関係の尖鋭化に対する中国政府の側に立った政治的な配慮からの指摘である。

これ以降、1980年代の大部分の論文に共通する論点として、1979年の中越間の対立が背景にある。さらに儂智高の本拠地の広源州が現在のベトナム・カオバン省に比定されるゆえ、カオバン省の帰属をめぐる論争が発生（粟 1980）したのである。

粟冠昌（1980）は、儂智高中国人説をとった。その根拠として、カオバン省は秦漢以来、宋元豊4年（1081）まで中国の領土であった点にある。そして儂智高の地方政権の樹立の目的は、ベトナム李朝の統治と奴隸的な使役に抵抗するためゆえ、非難できないとし、その軍事行動は愛国的でベトナム李朝の侵略に反撃する正義の行動であると評価した。

儂智高の行動が「愛国的」で「正義」であるかどうかの史料的裏付けは一切なく、中国の政治の投影に過ぎないことは前掲の通りである。また、広源州は羈縻州であったが、羈縻州を「領土」に含めることにも問題があると思われる。

粟はさらに、儂智高の邕州攻陥について、「宋朝の広西西部の辺防防御を軽視する間違った行為に対して軍をもって諫める作用を果たした」としている。儂智高の「内附」を拒絶した宋朝を批判する姿勢は先行研究にそっているが、挙兵を以て「軍をもって諫める」と解釈するには史料的裏付けが全くなく、粟の個人的な願望に過ぎず、敢えて言えば学術論文に書く内容ではないであろう。

粟は、儂智高軍の広州進撃について、「祖国を分裂させる罪悪活動」をし、「全国人民の願望に違反し衆は離反」し、そのことが儂智高が宋軍に敗れた原因とする。ここで儂智高の挙兵反宋を「非正義」とする。「起兵反宋の前、儂智高は広西西部少数民族人民群衆の心に民族英雄として出現」し、「壮族の民間の広大な人民が儂智高を崇拜」していた。つまり、ベトナム李朝に反抗して邕州を攻陥するまでは評価し、それ以降の両広地域（広西・広東）に「封建割拠」する動きを批判の対象としている。ここで注目されるのは、時期によって儂智高の評価が分かれる点、および時期が限定的

ながらも、挙兵以前は、儂智高は「民族英雄」視されていたという点である<sup>16)</sup>。

続いて黄国安（1982）は、儂智高中国人説をとった。しかし、儂智高を「奴隸主貴族の代表」で、「奴隸主階級の利益を代表する独立王国の樹立が目的」であったとした。奴隸を略奪することが挙兵のもう一つの目的で、したがって挙兵を「不義」の戦いとし、儂智高は「野心を駆使し叛乱を起こ」した。そして「広州に拠って自ら王となる」ことが挙兵の主要な目的であったとする。さらに「遅れた」奴隸制度を両広に拡大するのは時代に逆らい人々の意志に合わないので、その失敗は必然的であったとしている。挙兵の動機について、李朝勢力の広源州への拡大も一要因としているが、かつての陳・李・李（1961）のように、儂智高政権奴隸制論が復活し、さらに一步論を進めて挙兵の動機の一つとして奴隸を略奪するためという目的があったことを指摘している点が特徴的である。同論文では、「叛乱」という表現を使用している。『壮族簡史』（1980）刊行後も、こうした儂智高に否定的な評価がまだ可能で、批判を受けない時期であった。なお、黄国安は、『宋史』「蛮夷伝」にあるという、王朝の羈縻州に対する姿勢が現れた記載「朝廷は禽獣としてこれを扱う。羈縻するにつとめ、深く統治しない」を引用し、宋朝は羈縻州には賦税を課さないし、儂智高の献上する礼物さえも受け入れず、宋朝統治者の広源州への経済的搾取は軽いものであった。広西の正州に対する賦税も比較的軽微であった。それゆえ、儂智高の挙兵が民族圧迫・経済搾取に反抗するためというには根拠が欠乏していることを指摘している。宋朝の羈縻州・広源州への経済的な課徴が軽微なものであったことについて、黄は賦税額などの具体的な史料を提示してはいないが、それまでこの点にふれた研究はなく、注目すべき指摘である。

中越戦争のこの時期、儂智高が中国人であることに異議を提出したのが、『雲南日報』の記事「新沙皇の門徒」（1979年4月7日）である。それは「越南軍閥儂智高が“大南国”を建て、中国の広西・広東のいくつかの地域を侵略したが、一年を経ずして失敗した」という記事である。かつて儂智高や19世紀初期の阮福映が「大南国」を建国し周辺各国を「侵略」した歴史的な事件を批判することで、ソ連と結託したベトナムの「覇権主義」を批判したものである。おそらくベトナムの「覇権主義」を批判するために便宜的に儂智高が使われただけで、それ以上に儂智高をベトナム人とする根拠は何も示されていない<sup>17)</sup>。

儂智高中国人説について、学术界でも異議を呈する論者が出現した。それが復旦大学の周維衍である。周（1980）は、「広源州は羈縻州といっても、その実、交趾に服役していた」とする史料（『宋史』495 蛮夷「広源州」）の記事から儂智高が「交趾の



臣民」で「北宋の臣民」ではないこと。また儂智高举兵に対して否定的で、儂智高の宋朝の境土を割いて、(漢代南越の：筆者) 趙陀のように広州に「割拠」して王となる野心を批判した。「交趾の臣民」とする根拠は、儂智高が内附を求めてきた際に、広源州が「以前より交趾に役属し、交趾の臣民」であるとの判断にもとづいて宋朝側が内附を拒絶したこと、当時広源州が交趾の管轄下に置かれていたことにある。

周(1980)に対して黄振南(1983)が、宋朝と広源州との統属関係の存在に基づく批判を提出し、以降、周(1984)、黄(1986)と両者の論争が続いた。ただし、黄振南(1983)によると、儂智高は「壮族酋首」として「人民に対しては搾取者、圧迫者」で、それゆえ「搾取階級の本性」として、儂氏一族の統治を強化することが蜂起の動機の一つで、「反宋闘争を嶺南少数民族人民の命運と連携させることができなかった」とし、階級的立場から儂智高に対して批判的である。また、黄振南(1986)は交趾による宋朝の辺境侵奪の意図を批判する一方で、宋朝をも批判しており、儂智高の内附要求を拒絶した仁宗を以て「荒唐にして笑うべき」「昏庸」な皇帝として批判している。以降、仁宗を悪玉として批判をする論調の嚆矢となったが、こうした皇帝への批判の仕方は、個人の感情に過ぎず、学術論文に書く内容ではないように思われる<sup>18)</sup>。

周(1980)のもう一つの論点である儂智高の広州への「割拠」に対する批判について、韋文宣(1982)や談琪(1985)は反論を行った。韋(1982)は、儂智高の反宋行動は十分に肯定される正義の戦争で、儂智高を以て「祖国の辺疆を保衛し交趾の侵略に反抗した英勇戦士」とする。さらに、もし、儂智高が勝利していたら、嶺南(広東・広西・海南：筆者)に国家を作り宋と対立したであろうが、これはかつての三国時代のように「祖国を分裂」させるわけではないとしている。交趾に投降せず、独立王国を建て一方に割拠せず、起兵反宋活動をしてその「反動統治」を覆そうとしたのは、「正確な選択」で、「祖国に忠で祖国を熱愛する具体的行動」と評価している。ちなみに韋は儂智高政権を奴隸制とは見なしていない。また、儂智高は敗れたものの、事後に広西への大赦、罪人釈放、税役減免、交易地点の開設において、宋朝の壮族人民と嶺南の各族人民に譲歩を引き出したとする。税役減免についてはかつての南躍(1959)に挙げられているが、南躍同様、正州と羈縻州の区別はもとより、史料が挙げられていない。大赦や交易地点の開設について、とくに交易地点の開設は儂智高をはじめとする現地の首長の経済基盤を検討する際に重要な切り口となるように思われるが、この点についても具体的な史料の裏付けがない。

韋(1982)の「分裂割拠」をめぐる指摘について、「独立王国を建て一方に割拠」したわけではないとすることの根拠が示されておらず、理解し難い。想像の域を出な

いが、儂智高が「祖国を熱愛」したので分裂割拠を考えなかったという論理では、個人的な愛国思想を儂智高に投影したとしか考えられない。とはいえ、後の儂智高の愛国者としての評価の端緒として韓（1979）同様に注意を払っておく必要があるだろう<sup>19)</sup>。

談琪（1985）は、やはり周維衍説を批判した。当時、壮族の社会生産力の発展にともない封建的生産関係が主要な形式になっており、「労働群衆」が安定した局面を要求していた。儂智高の民族政権はこうした時代の要求に順応しており、「祖国を分裂させてはいない」とする。そして、「広大な人民群衆を組織し交趾李朝の侵略拡張に抵抗する」際に「民族政権の樹立は理にかなった選択」だとしている。談は、「民族政権」について、多民族国家において漢族以外でも各民族は独立発展の平等の権利を有すること、民族の利益・発展、民族間交流と民族間関係に有利で、「祖国の大家庭」から離脱しなければよいとしこれを肯定している。当時の遼・金・西夏政権同様、「祖国を分裂させず」に北宋に侵略しなかったという。他方で、交趾の侵略拡張に反対し「祖国の領土を維持」したとする。談は、現在の多民族国家中国において諸民族がもつ権利としての「独立発展」を、「政治的独立」とは別物として区分したうえで歴史に投影しようとしたように見えるが、当時の遼・金・西夏は政治的に宋朝から独立していたのではなかろうか。儂智高が宋朝の領土内に割拠しようとした以上は、非漢族であっても「分裂割拠」で「祖国の大家庭」から離脱する志向性を持っていたと考えられないであろうか。この点、周宝珠・陳振主編（1985）など歴史学からの研究では、韋（1982）や談（1985）とは異なり、儂智高が中国南部に割拠政権を樹立することを企図したとしている。

韋（1982）や談（1985）の考え方は、著者個人の愛国的な感情や現代のナショナリズムの過去への投影であるものの、現代中国の政治上、「分裂」は敏感な問題である。学術研究といえども政治問題として問題視されないよう配慮せねばならないが、その点に研究の困難さがあるよう思われる。

以上の諸説に加え、黄現璠（1983）は儂智高を題材にした初めての単著である。それによると、儂智高は「中国壮族」で、「犠牲を恐れず鬪争をした」「英雄人物」の一人である。交趾の侵略に臣服することに甘んじず、内附したが「軟弱で無能な」宋朝に拒絶され、迫られて挙兵したとする。その挙兵は、「進歩的な正義の戦争」で、「民族的起義」であったとする。くわえて儂智高政権が「封建制地方政権」であったことを指摘している。

黄現璠・黄増慶・張一民『壮族通史』（1988: 751-758）は、政府の公定の通史とし

て出された。それによると、儂智高の戦争は、北宋の階級圧迫と民族圧迫に対する正義の反抗闘争であること（直接の動因は嶺南の宋朝官吏の「貪汚」による）、外からの侵略に反対し祖国の辺防を強め祖国の統一を維持する任務を遂行したこと、民族団結を促進し、中華民族の形成と発展に有利であると評価できることが指摘されている。「分裂割拠」問題には言及せず、民族団結を重視した点に加えて、「中華民族」概念を前面に出して中華民族の発展に寄与したという評価がなされている。ただし、『壮族通史』（1988）の「中華民族」概念は、費孝通の『中華民族多元一体格局』（1989）の登場よりも早く、費の理論の影響を受けてはいない。「中華民族」の含意についての説明もされていない。まして、現在のこの称谓の用法のように国民を統合するための政治的意義はまだそれほど強くないと思われる。この点は、外来の侵略者に抵抗した「中華民族」の歴代の英雄の一人として儂智高を位置付ける韋（1982）も同様である。なお、この時点では、壮族出身の粟冠昌・黄現璠などを除けば、公定の通史は「民族英雄」としての位置づけをしていない。

なお、狄青移住伝承については、壮族が「民族圧迫・蔑視を受け殺されるのを恐れて」、「狄青に従軍した漢族」と主張した可能性を示している。この点は、粟（1963）の学説を踏まえた内容で、現在の状況の過去の歴史への投影の色彩が濃厚である。この時点では河原（1944）の堅実な実証や牧野巽（1985）の柔軟な考え方に基づく所説は生かされていない。

ここで1980年代以降は、1950～60年代のように封建制・奴隷制論争といったマルクス主義的史観を前面に出した論争が大きな潮流としてもは学界の中心的な論点になり得なくなったことに注意する必要がある。中国共産党の党是としてのマルクス・レーニン主義は現在も不変であるし、それぞれの民族の「発展段階」を位置付ける政府見解は維持されている<sup>20)</sup>もののパラダイムは大きく変化した。この点について、『壮族簡史』（1980）において政府の公的見解として「民族起義」論が主唱されたことも転機の一つとして考えられる。談（1985）が指摘する「民族政権」も政府の見解を受けてなされているが、総じて言えば、マルクス主義的史観から民族を主体とするいわば「民族史観」へと向かうパラダイムの転換は、1980年代以降の脱文革、脱毛沢東化と改革開放政策の進展のもとでの民族とその文化が再評価される動きにともない徐々に生じたように推測される。

本節をまとめると、中越戦争の時期以降、1980年代に広西では儂智高中国人説が有力となった。ただし厦門大学の周維衍等、他省では交趾人説も見られた。その場合は儂智高挙兵には批判的であった。儂智高の嶺南への「分裂割拠」については両方の

説があった。宋の領土内に独立国を樹立したのに、分裂ではないことを主張する学説（談 1985）が相次いで登場した。また、1950年代後半、1960年代初期の階級論争史観をひきずっており、儂智高政権について封建制・奴隸制論、正義・非正義論が再び提示された。さらに、「民族英雄」観がまだ固まっていない。黄現璠は全面的に儂智高を以て「英雄的人物」としたが、粟冠昌（1980）は挙兵前の時期に限定して「民族英雄」とした。加えて黄振南（1986）が仁宗皇帝を批判したことなどに見られるように記述が往々個人の感情に陥りがちであった。韓（1979）・韋（1982）などに見られるように儂智高を「愛国者」としその戦争を「愛国行動」とするなど、現在のナショナリズム的思想を過去に投影しようとする動きが見られた。「中華民族」と関わらせた論調が生じるのも1980年代のことである。

### 3.4 1990年代後半以降2000年代前半まで

#### ①雲南・東南アジアへの研究の拡大

1990年代に入り、まず中期に、従来には見られなかった研究が現れた。一つは雲南への、一つは東南アジア大陸部への研究の広がりである。范宏貴（1995）は、広西だけでなく雲南にも儂智高ゆかりの伝承や遺跡が広範にあること、さらにベトナムのタイ族・ヌン族のもとにも儂智高の伝承・故事が伝えられ、現地で儂智高が民族英雄と見なされ廟宇が建てられて神格化されて祭祀の対象とされていること、くわえてタイやミャンマーにも儂智高あるいはその兵士のゆかりの伝承があることを指摘した。

雲南への研究の広がりについて、儂智高が狄青軍との崑崙関帰仁舗での決戦に敗れた後、亡命したとされる広南（現文山壮族苗族自治州広南県）を含む雲南への関心が向き始めた。何正廷（1995）は、従来研究がほとんどなされなかった儂智高の雲南への亡命とその現地への影響を論じている<sup>21)</sup>。儂智高が、大理国王に殺害されたという説、元江のハニ族に毒殺されたという説、大理での病死説、大理に潜伏したが結末が不明という、さまざまな説を挙げている。さらに、雲南文山州や紅河ハニ族のもとにおける儂智高およびその部隊に関する伝承があることが指摘されている。范主編（2005）にも、1997年・1998年に発表された儂智高の雲南亡命に関する何正廷や農賢生<sup>22)</sup>ら雲南の学者による論文が数篇収録されている。何（1997）は、儂智高の「民族起義」は宋の階級圧迫と民族圧迫に対抗する「正義」の戦争で、「壮族の民族戦争」であることを強調している。

何正廷主編（1998）は写真集だが、109頁で、広南県に残された関係する遺跡の紹

介文として、「民族英雄儂智高」が交趾の侵略と朝廷の鎮圧に堪えられずに「民族戦争」を發動したことが指摘されている。農賢生（1997）も儂智高が「壮族の領袖」のみならず「中華民族の英雄」としている。このように儂智高を民族英雄として評価する雲南の学界の独自の動きが注目される。

カウプ（Katherine Palmer Kaup）（2000）は、雲南の壮族は自らを「儂人」「土人」「沙人」の3支系の中の1つであると見做し、とくに53%もの人々が自らを「儂」として「壮族」とは異なることを自認しており、「支系」への帰属意識が（そのことが政治的アイデンティティの形成に寄与していない）広西よりも強いこと（37-38）、雲南壮族にナショナリズムよりはローカリズムへの志向が見られること（175-176）を指摘している。雲南壮族の独自の動向は壮族の民族集団としての成り立ちと現状を考える上で注目に値するが、本稿ではこの問題には立ち入らない。

何（1997）はまた、儂智高の部隊が広南を中心に広大な地域（文山から開遠、瀘西、羅平、建水、紅河、元江等、当時の大理政権の「37部首領」が統治する地域）で活動し、広南とその周囲の壮族地域を押さえ、新平・元江・普洱およびそれ以南のタイ族の中に融合、さらに紅河・緑春でハニ族と共存したことを指摘している。くわえて、文山壮族苗族自治州の壮族が過ごす行事「六月節」「七月節」について儂智高軍が宋軍の包囲を突破したことを記念して各村で行われる儀礼であることを紹介している<sup>23)</sup>。その後1990年代後半から2000年代にかけて研究が本格化した。

次に東南アジア大陸部への研究の広がりについて、その背景に、1991年に中越国交正常化が行われ、范宏貴が1992年ベトナムを学術訪問した。ベトナム側で、中越正常化以降、1992年11月にハノイのベトナム歴史研究所で「歴史人物儂智高学術討論会」が開催され、その成果として1995年に15本の論文を集めた『儂智高論文集』がカオバン省共産党委員会宣伝教育部・同省科学工芸与環境保全局・文化通信局によって出版された（范主編2005: 483-485）。このうち1995年に出されたベトナム側学者の2編の論文が中国語へ翻訳されて范主編（2005）に掲載されている。さらに黄良論文（ハノイ民族大学、1995年にタイ国政治法科大学研究会・教育部国家文化委員会編『關於陶洪・陶真歴史文化方面的史籍』に収録）が収録されている。黄良によると、儂智高はタイ族あるいはトゥー族とされ、李朝を助け国家を保衛しベトナム人の「民族英雄」として評価されているという<sup>24)</sup>。

1990年代前半にタイ国と広西の間の学術交流が進んだ<sup>25)</sup>。范自身も壮族とタイ国のタイ族との関わりを研究している。このような中国と東南アジア諸国との交流の開始と東南アジアへの関心の高まりが背景にあった。范（2000）は、儂智高とその兵士

が大理から金齒鎮（現徳宏タイ族景頗族自治州）、孟都（ビルマのシャン州）、蒙光（ビルマのカチン州）に入った可能性、元江の花腰タイとの関連の可能性の指摘をしている。

1997年になると、公定の『壮族通史』として論文が公表された（張声震主編1997）。それによると、儂智高の戦争は、「壮・漢労働人民の広範な支持」を得て、ベトナム李朝の統治者の侵略と奴隸的な使役、北宋の民族圧迫と階級圧迫に反対する正義の戦争であること、また、宋朝は広源州の主権を放棄し壮族人民の利益、国家の利益を犠牲にしたこと、さらに、生産力の回復、大赦、税役減免等、宋朝の嶺南人民統治政策に譲歩を迫ったことが指摘されている。これらの点は従来にも提示されたが、公定の『通史』が宋朝の責任をあらためて追及したことが目新しい。さらに、儂智高の戦争の結果、土官制度を樹立し宋朝と左・右江各族首領の政治的隷属関係を強化したこと、儂智高による「民族統一政権の樹立」がなされ、そのことは壮族の「自分たちの統一的な民族地方政権を形成する意志の反映」としている点が注目される。儂智高敗亡後に宋朝の左・右江地域への政治的影響力が浸透していくことは河原（1959）でも指摘されたが、中国学界では指摘されてこなかった。なお、「民族統一政権」は、現代の概念で、宋代に意識されていたか疑問であるし、そもそも左・右江流域の諸民族が儂智高のもとに「統一」されたのか否かも疑問である。

## ②メディアの役割と研究の地方への拡大

1990年代の動きとして、莫家仁（2000）の指摘は注目される。莫は論文の中で3つの出来事を挙げている。まず、第一に、1980年代後期に、観光目的で儂智高の銅像を崑崙関に建てようとする動き、および王守仁の銅像を南寧市の青秀山公園に建てようとする動きがあったという。この動きは1980年代後半のことではあるが、崑崙関は儂智高が狄青率いる宋朝軍との決戦に敗れた地であり、王守仁は明代に「壮瑤族人民起義」を鎮圧し大量に虐殺したので不適當だという意見が強く、ともに失敗に帰した。しかし、この論争は自治区共産党委員会や国家民族委員会を震撼させ、「終わったこと」にされた。その政治性ゆえ儂智高の銅像は現在に至るまで目立つ場所には建てられていない。

第二に、1996～97年に、儂氏の族人が靖西県（南天国の故地とされる）に記念碑を建てたところ、あるメディア記者が儂智高が「造反」して「分裂割拠」をしたことを指摘しようとして記念碑建立事業を批判したという。

莫は、儂智高は後裔にとって記念となるのに値し、当事者が自分で決めるべきで、

それが民族の感情と権利であって、封建統治者の伝統思想観念でむやみに批判すべきでないという意見を論文に述べている。この「記念碑」は、1996年春から靖西県の儂芸青・儂兵・儂国権・儂正章や靖西県の付近の4県の人々を中心となって準備組織を立ち上げ、広く募金を集め、靖西県湖潤鎮坡州村の地に1996年12月に完成し、1997年農曆正月8日に落成式典を行ったものである。その記念碑の建てられた地の奥の洞窟は「儂智高洞」と呼ばれ、広西の諸学術機関の専門家が調査を行った結果、宋代の遺跡であることが判明したという。記念碑建立に際しては、自治区政府副主席・広西壮学会名誉会長張声震、広西民族学院范宏貴等、広西の民族学界の知名人の「題詞」が寄せられたという（儂芸青「広西靖西県坡州儂智高出生地紀念碑籌建情況簡介」范主編 2005: 119-124）。そこには儂智高像も建てられた。ここで注目すべきは、儂芸青から地元の県の幹部とメディアの「参入」である。儂芸青は、先の記念碑建立準備委員会の会長であり、1999年当時、中国共産党靖西県宣伝部の地位にあった。儂智高について、「壮族人民を率いて交趾統治者の侵入に抵抗し国家を防衛した」「壮族の領袖、民族英雄」という評価をしている（儂 1999）。注意したいのは、地方の学者の活躍である。靖西県など県の機関に属する学者は1980年代後半に儂智高の故事に関する地元の伝承を収集して論文を公表していた<sup>26)</sup>が、范主編（2005）に収録された論文をもとに判断すると、1998年に農賢生の、2000年に雲南省広南県志弁公室顧問の儂鼎升の論文が見え、（実際には峻別しにくいのであろうが、省都区会の置かれた都市や桂林市などの大学・研究機関以外の地方の研究者という意味で）これまでも増して地方の学者が研究の第一線に参入するようになった点で研究の裾野がより広がったと言えよう。

メディアについて、莫家仁はどのメディアかは明らかにしていないが、これまでほぼ学者が専有していた儂智高問題にメディア「記者」が参入したことは、その内容の如何を問わず、より広範に読者である人々に儂智高問題を訴え、儂智高に対する現代社会の関心が広がる契機になったよう思われる<sup>27)</sup>。

莫家仁の論点の三点目として、1998年に出版された『同舟論——広西民族関係』という本（上下2冊）の「歴史上の民族関係」の部分について、おそらく儂智高問題のうち外国（ベトナム）に関わる部分や政権樹立問題が敏感であるがゆえに、不思議なことに編集者側が著者に相談せずに「歴史上の民族関係」を削ってしまったという。莫は、『壮族簡史』『壮族通史』等儂智高の挙兵に肯定的な単著や論文、また『簡明宋史』『中越関係史簡編』等、儂智高に否定的な論文もあるが、儂智高問題は民族関係上回避することができない重要事件であることを指摘して（おそらく問題が起きそう

な部分を削除した行為を批判して) いる。いずれにしても、このような事件が派生する背景に、儂智高政権を論じようとする際には「分裂割拠」問題にふれざるを得ず、その点で扱いの困難さがあるものと推測される。なお、莫の儂智高に関する検討のなかでもう一つ重要なのは、封建的王朝の伝統的な正統的な思想、たとえば儂智高に関する史書を残した統治者とその「御用文人」の辺境の少数民族を「蛮夷」「禽獣」と見る観念の影響が極めて大きな慣性を持ち、今に至るまで一定の影響を及ぼしており、記念碑批判事件はその一端とする点である。

莫の儂智高問題に関する他の指摘としては、ベトナム李朝の儂智高への圧迫、宋朝の対ベトナム放任政策、儂智高の内附を拒絶し、辺境の領土の喪失を顧みなかったことに見られる宋朝の「愚かで無能」な対応を批判し、儂智高を善玉としてその正義性を評価している。儂の挙兵は宋朝とベトナム李朝の「侵入者」が共同で逼って起きたものとする。儂智高の分裂割拠については、これを否定し、宋朝と共同で敵を御し辺境の領土の回復と国家の統一を達成を目的としたとした。くわえて、儂智高軍による略奪殺人については官軍の行為のほうがひどいし、そうした殺人の描写によっても挙兵反宋の正義性は変わらないこと、さらに「遅れた」奴隸制が「先進的な」封建制に反対した問題について、「遅れた」民族が自らの生存と発展のため反圧迫、反蔑視の闘争をすることの正義性を指摘したうえで、儂智高挙兵以降の宋朝による対辺境民族地区の統治制度の整備や少数民族社会の進歩発展から、儂智高挙兵の「進歩性」を指摘している。さらに、壮族が歴来、積極的に祖国の統一と中華民族の団結を堅持し、そのことに大きな貢献をなしたことにふれて、「平等に民族を待遇する」ことを人々が希望していること、民族の傑出した歴史人物はその民族の発展にとって「背骨」であり、そうした人物が輩出することによって初めて民族の強大な凝集力・生命力が生まれることを指摘している。

### ③「万揆一論文事件」と2000年代の動き

先にメディアの参入が見られたことにふれたが、この点に関連して2000年に新聞に掲載された記事をめぐって研究に波紋を巻き起こす大きな動きがあった。

『雲南日報』2000年12月17日号に、万揆一「北宋勇士入滇緝叛首」が掲載されたことが発端である<sup>28)</sup>。内容は「北宋名将狄青」が率いる軍隊が、「叛乱」を起こした「叛首」儂智高を討伐したこと、宋側の軍を「勇士」としたことである。

これに対して各方面からの反論が提出された。羅(2008)によると、2001年7月18日に文山州共産党委員会統一戦線部が「儂智高問題座談研討会」を開催し、万揆



一論文について壮学会学者が広西・雲南の広大な壮族同胞、とくに壮学会会員の憤慨を引き起こすものと見做した。「儂智高問題座談研討会」の意見は、『雲南日報』文山駐在の記者に（学会員と）連絡通話し新たに紙面を設けて討論を行うことを要求し、『雲南日報』は公開で謝罪すること、省民族事務委員会が省壮学会と文山州壮学会を組織して研究会を発展させて専著『壮族民族英雄——儂智高』を出版し宣伝の力を強めて壮族民族英雄儂智高の知名度を高めること等であった。

『雲南日報』側は、儂鼎升「北宋民族英雄儂智高」（『雲南日報』2002年5月15日）を掲載し、儂智高の功績を肯定することで対応した<sup>29)</sup>。儂鼎升は、過去に鉄路局等の任務で各地に赴任し、1996年から2年間、広西・雲南の各地23市県を回り、儂智高関係の研究を開始したという経歴を持つが、儂（2002）では万揆一を批判している。このように、文山壮族苗族自治州という壮族が多く居住する地で、運動の発端となったのは政府（統一戦線部）ではあるが、いわば「地方」から儂智高の評価をめぐる異議申し立てが生じたことは従来にはなかったことである。

この動きとともに儂智高の「民族英雄」としての位置付けが一層定着したよう思われる。

儂智高の「民族英雄」としての位置付けは、先述のように張景寧（1952）を嚆矢として、黄現璠（1983）や粟冠昌（1980）といった広西の壮族出身の学者が使用し始め、儂芸青（1999）さらに1990年代後半に壮族出身の広西の地方の学者、雲南の学者が主張したものである。そのことは漢化が顕著な状況の中で壮族の民族としての主張、ひいては広西・雲南と民族の置かれた環境が異なって<sup>30)</sup>互いに連携しにくい状況のなかで、壮族知識人にとって地域を越えた民族としての一体感の創出につながっていったよう推測される。儂智高に関する伝承や遺跡の残る地域は広西靖西県や雲南省文山州などに限られており壮族居住地域全域に広く及ぶわけではない<sup>31)</sup>ものの、こうした壮族知識人の動きは注目される。2009年に南寧市の一般市民向きの新聞『南国早報』（7月11日）に黄振南の論文「壮族英雄儂智高」が公表されたが、そのことはその頃までに儂智高の「民族英雄」としての地歩が固まったことを物語っている。

しかし、注意したいのは、壮族が多く居住する広西・雲南文山州、および壮族出身以外の学者は儂智高に対して冷静で一定の距離を保っていた点である。たとえば漢族の尤中（1985）は、儂氏について邕州から交趾北部一帯の「壮族のうちの貴族分子」が自己の「地方民族割拠政権」を樹立しようと企図したこと、儂智高が広州へ攻め上る過程において、現地の壮族であっても儂智高の蜂起に賛同せず、多くの壮族武装勢力が儂智高を鎮圧する軍事行動に参加したことを指摘している。広西・雲南以外の研

究者として、郭振鋒・張笑梅（1999）は、儂智高蜂起を「儂智高事件」「反叛」「反変」「叛乱」、蜂起を鎮圧した狄青を「愛国将領」としている。しかし、他方でベトナムについては批判的で、熙寧8年（1075）の李朝の宋への攻撃については「侵略者」として批判し、「愛国軍民」が全面的に支持し宋軍が李朝の侵入を撃退したとしている。民族問題に関わる領域を扱う民族学と宋史全体のなかでの位置づけをする歴史学との見解の相違があるかもしれない。歴史学の側からは、以前にも儂智高に対して批判的な論調が見られた。たとえば、周宝珠・陳振主編（1985）『簡明宋史』では、儂智高を「賊」とは明記しないものの、「野心」をもって広州で王になろうとしたこと、これを名将狄青が鎮圧したことを指摘している。また儂智高の広州包囲戦での「野蛮」な行動を批判している。周・陳（1985）は儂智高の「割拠」問題についても批判的で、この点でも民族学者の論調と異なっている<sup>32)</sup>。羅（2008）は、「儂智高問題座談研讨会」を掲載した馬関県壮学学会編（2004）<sup>33)</sup>を引用して、先の尤中（1985）の論文を以て儂智高起義について「不公正で客観的でない」としている。この点について、伊藤（2002）が指摘したように、儂智高は壮族を国民として一つにまとめていくためのシンボルとして国家の政策にとって重要であった。このため中国の民族学は、国家の民族政策に寄り添う立場に置かれていたであろうことが推測される。政府の肝入りによる大掛かりな資料集である范宏貴主編『儂智高研究資料集』（2005）が刊行されたこともそうした政策の一環である。また、羅（2008）は馬関県壮学学会編（2004）を引用して次のように指摘している。すなわち「歴史の真相を明らかにし、儂智高を公平に扱い、その起義を本来の真相のままに扱い、壮族人民を公正に扱えば、中国共産党の民族平等の民族自治政策が具体的に体现され公に遂行されるのだ」と。羅ら民族学者は儂智高解釈の際には歴史文献で「真相」を追究するのみならず「壮族人民」を「公平」に扱う政府の民族政策にも向かい合っ来ざるを得なかったのである。

#### ④愛国思想の高まりと儂智高

2000年代に入って、もう一つの大きな動きとして挙げられるのは、白耀天による広源州の帰属国の問題を解決する新たな視点と愛国主義の高まりを背景とした儂智高愛国者説の普及である。

白耀天（2000a）は、緻密な考証で李朝が儂存福・儂智高父子に勢力範囲として領有を認めた儂猶州・雷洞・火洞・頻洞・婆洞・思朗州の比定を展開し（思朗以外は全て現在の中国の地に比定）、「大曆国」の建てられた儂猶州を通説の扶綏県、あるいは靖西県ではなく、右江の外、田州・凍州といった宋朝羈縻州の近辺に比定した。その

作業を通じて儂智高父子は宋朝の臣民であることを指摘した。さらに、宋代の広源を現在のベトナムの広淵よりも広い範囲の10州洞を含む「広源道」とし、広淵をその「首州」として位置付けた。白(2000b)によると、広源道の範囲は今の広西の那坡県・靖西県中南部・大新県西部およびベトナム・カオバン省境内に及ぶという。白は地名考証の見直しを通じて、儂智高中国人説を主張した。

白(2001)はさらに、儂智高の挙兵の動機の一つとして科挙の進士不合格があることを挙げ、そこから儂が「宋朝の中国人である」ことを主張した。儂の科挙不合格はすでに黄現璠(1962)が指摘していたが、白は進士に合格することで宋朝の「撰官」(臨時の現地任用官:筆者)を得ようとしたことと広源州の金の産出にもとづく経済文化的発展を挙げて、交趾に対抗して自己の勢力を保つべく「民族経済市場」ないし「民族の統一的な政権の実体」の樹立を構想したことを指摘した。進士不合格は、宋の張端義の文集『貴耳集』三集にある「発三解」、すなわち二度、州での試験である解試に合格したが、進士になり得なかったことで志を得ずに両広に起兵したという記述に基づいている。

荒木敏一(1984)は、この問題に関して官制史の立場から専門的な検討を行い、羈縻州を含む左・右江の溪洞地域に解額(解試受験枠)2名が設置されていたこと、儂智高が邕州に来て解試を受けた可能性、おそらく実際は慶暦元年(1041)に一度邕州での試験に合格したものの、宋朝の羈縻州にありながら交趾にも服属したとして、解送リスト(第二段階の中央の礼部での省試への受験者リスト:筆者)から除外されて進士になることができなかつたであろうこと<sup>34)</sup>、金の産出という豊かな経済的環境ゆえ応挙が可能であったであろうことを指摘している。荒木は、当該地域が羈縻州とはいえ壮族の多く居住する地域は(中国文化という意味で:筆者)文化的レベルの高い地域であったことを推測している。ただし、桑原隲蔵(1935)説を引用して「蕃坊」に居住するイスラム教徒、さらに高麗人など中国王朝の統治下あるいは影響下にある地に居住する外国人にも応挙が認められていたという。この点からすれば、科挙に応試したことを以てその人が「中国人」であるという論理は無理がある。

清末まで中国王朝に暫定的な「版図」しかなく、近代的な意味での明確な国境概念がなかったものと指摘されている<sup>35)</sup>ことからすれば、中国の学者の主張する現代的な意味での国家を指す「中国人」であったとは限らないであろう。

くわえて、暫定的な版図であるとしても、儂智高死後26年後の元豊元年(1078)に中越王朝の境界が画定された(范2000)ことからすれば、それ以前の儂智高の時代に中越間に明確な境界が引かれていたとは言い難いであろう。

ともあれ、上記の白耀天の広源州の範囲に関する指摘は梁庭望<sup>36)</sup>(2001)が支持し、この見方が強まり、儂智高の国籍問題に大きな進展をもたらした。

梁(2001)は、白の考証を支持して広源州が中国の領土であることを指摘し、くわえて、儂智高の戦争が、交趾による蚕食に反対し争って宋への「内附」を選び領土割譲に反対し「保境自守」をした「愛国戦争」であることを指摘した。儂智高の地方政権の樹立(大南国)については、「中央王朝の正統の立場に立って宋朝を倒そうとするものを“反叛”“内寇”と罵倒することはできない」「中央政権が永遠に正しく地方政権が永遠に間違っているとするのは歴史的事実に符合しない」とし、中国の土地と人を売り飛ばす「売国」でなければよいとして、これを肯定した。当時の江沢民政権下での愛国思想の主張と普及がその背景にあるであろうことは容易に推測される。梁(2001)は、儂智高による地方政権の樹立について、少数民族による歴史的な地方政権を肯定したうえで、儂智高が広源州の土地を「保境自守」をし交趾に「不法に」占領された土地を「内附」という形で「宋朝に迫って受け取らせた」としている。分裂問題という、政治的に微妙な問題を独自の論法で解釈をしているが、現代からの視点が濃厚であって、当時の儂智高が宋朝に広源州、すなわち自領を「受け取らせる」意図があったとするには無理があるであろう。こうした論法で強引な説明を加えねばならないほど分裂問題は敏感な政治問題であるということもできよう。

本節をまとめると、1990年代後半に、隣省の雲南やベトナムをはじめとする東南アジアが儂智高研究の地域的な広がりが見られるようになったこと、東南アジアに関しては背景にベトナムとの国交正常化やタイ国との学术交流の発展などがあり、中国人の東南アジアへの関心の高まりが指摘されよう。また、研究者の裾野が省区のみならず州県に広がった。さらに学者のみならずメディア記者が参入して研究の裾野がさらに拡大した。2000年の万揆一論文事件を契機に、儂智高の「民族英雄」としての位置づけが壮族や広西・雲南文山などでとくに定着していった。そのことは、1950～1960年代のマルクス主義的史観からいわば民族史観へのパラダイムの転換を示すとともに、壮族の民族としての一体感の創出につながったであろう。

分裂問題が政治問題として一層微妙な問題になるなかで、白耀天の地名比定など新たな研究の深まりが見られ儂智高中国人説が一層有力になった。愛国主義思想の普及という時代の風潮を反映して儂智高の「愛国者」「愛国戦争」としての位置付けが動きが強まった。

伊藤(2002)の指摘に立ち帰ると、人民共和国の民族政策として、壮族を国民として一つにまとめていくために、シンボルとして「民族の英雄」というイメージを創り

出そうとしたという指摘に関して、そのことが当てはまるのはこの時期のことである。しかし、中国の学界がこぞって同一の方向に向いていたわけではなく、壮族出身や広西・雲南文山州以外の学者、歴史学者は別の意見も提出したことに注意を払う必要があるであろう。

### 3.5 近年における動向

2000年代中期以降、インターネットの普及にともない、また自らの先祖のルーツ探しの族譜編纂ブームが相まって、儂智高研究に新たな現象が出現した。

その大きな動きは、ウェブサイト「農氏網」(2009.5成立, <http://www.nongshi.org>)と「岑氏宗親網」(2006.10.28成立, <http://www.cszqw.net>)を通した農氏と岑氏との対立である。農氏網は、海口市に連絡所を置く。族譜の編纂は、1980年代後半に広西横県・南寧で農姓代表大会で決議され、1995年に一部が『農姓史考』として刊行された。後に、1996～97年に農姓族務委員会、『雁門農氏宗族譜』編纂委員会の組織が整備され、族譜に広西東南部の各県市に居住する農姓が入譜した。遠祖は神農や帝堯、周にまで遡るとされるが、族譜で系統を辿ることの可能な始祖農宰詢は元朝の浙江錢塘人で、浙江や湖北で知州の官を歴任した。その長男が旨を奉じて広西の潯州・梧州・平樂・思恩四府を遠征し戦功を立て武縁県(現武鳴県)知県に任じられ、後に子孫が広西東南部に居住した。農宰詢以前は世系を辿る記録が完備しておらず「無世系可考」だが、儂智高をも遠祖の内に加えている<sup>37)</sup>。

儂智高に対する評価は、「民族英雄」「広西の農民起義の先駆者」等として非常に高く、近年の状況に応じて「愛国の代表者、反腐敗の先駆者」と称えられるほどである。農姓は、横県、貴港市、靈山県、浦北県、賓陽県、馬山県、都安県、邕寧県、南寧市郊、欽州市、武鳴県、防城港市、扶綏県、北海市、陸川県、うち横県各郷鎮に多く居住(1980年代の族譜編纂の提唱も横県の子孫から開始)している。農氏は広西東南部に多いことからすれば、壮族以外に漢族も加わっているように見受けられる。広西以外にも、2013年9月、広東江門市で広東省の農氏の宗親会の会合が開催されたり、2014年8月に広東仏山市で宗親仏山集会在開催されるなど広東省珠江デルタにも農姓が広がっているようである。

岑氏宗親会は、正式には広西岑氏宗親会で、2006年10月28日に、後述の広西始祖岑仲淑の墓参が賓陽県で行われた際に参加した裔孫によって成立した。全国各地の会員は188名だという。宗親会の連絡所は南寧市にある。遠くは(伝説上の)周の文王の異母弟の子渠が殷紂王平定に戦功があったとして武王から岑の地に封建されたと

いうが、族譜で辿ることのできる祖先は漢の征南大將軍舞陰侯岑彭、唐の岑文本や詩人岑參、宋朝の岑景全らである<sup>38)</sup>。岑彭以来の第一宗支（河南省南陽）、唐代の岑參に由来する第二宗支（四川）、宋代の岑景全に由来する第三宗支（浙江）、その孫という岑正淑に由来する第四宗支（広東）、そして岑仲淑に由来する第五宗支の5支系に区分されるという。広西岑氏の直接の祖先は岑仲淑であり、岑氏宗親会は広西の会員によって構成される。この岑仲淑は、雍正『広西通志』61、土司、「泗城府」によると、「始祖岑仲淑、浙之余姚人。善岐軒術。宋仁宗朝從狄武襄征儂寇，克柳城破邕州。智高既平，朝議以仲淑鎮其地，都督桂林象郡三江諸州兵馬」とあって、狄青率いる宋朝軍に従軍して儂智高軍を鎮圧したという人物<sup>39)</sup>で、その子孫には明代の田州・泗城州・思恩・鎮安の各府の土官や清末の雲貴総督岑毓英・岑春煊父子など右江流域を舞台に実在した人物が挙げられる。1998年に宗親理事会が編纂したという『広西岑氏族譜』によると、百色地区の12県、南寧地区の8県をはじめ、広西各地の38県市に及ぶが、広西西部右江流域の百色地区に多く居住しているようである<sup>40)</sup>。

両者がかつて儂智高挙兵の際に仇敵関係にあったとされることから、儂智高に対する評価が正反対に分かれている。両者による論争の例として、たとえば、岑時一（名誉会長11人のうちの1人、元広西建設銀行副代表）は2009年に「英雄屬於狄青，不屬於儂智高」と題する論文を岑氏網に掲載しているが、その見出しだけでも、「儂智高の“内附”はニセモノ」、「勢力を拡張し建国称帝するのがホンネ」、「儂智高と宋朝の矛盾は分裂と反分裂の矛盾」、「狄青は儂智高叛乱を平定した第一の功臣・英雄」等で、儂智高批判に終始している。主要論点は、儂智高の挙兵反宋は「叛乱」、儂智高は「交趾人」、儂智高は「中華民族の罪人」で「分裂」を企てたとしている。他方で儂智高を鎮圧した狄青の戦功を褒めちぎり、「公平と私利、創造と保守、正義と邪悪の戦争」であるゆえ、「狄青を貶め、儂智高を褒め英雄とすることは現今の壮族を含む中華民族の感情と完全に食い違う」として農氏側を痛烈に批判している。これに対して農氏側も反撃をした。先の農芸青（靖西県壮学会）のメールを掲載し、岑時一の論文は宋朝側の史料を見ておらず史学知識が欠如しており、論点は全て間違いであるとした。これ以降、両者の応酬が続き、岑時一（2012）「再談英雄屬於狄青，不屬於儂智高」は宋代の史料を見た上で反論し、農氏側も農鉄周（2012）「也談英雄屬於狄青，不屬於儂智高」でこれを再批判している。史料を見ないで論文を書いたと批判を受けた岑時一は元銀行家で、農氏側も当然、研究者とは限らない。これまでの中国の研究者が使用した史料は限られるので、自ずと論点に限られている。しかも学術的な論争というよりも感情が先走りしがちである。

ともあれ農氏・岑氏の多くの人々がウェブサイトを通じて、儂智高論争に参加するようになったのである。そこに寄稿する人は研究者とは限らず、また地域も広西の広範囲に及び、壮族とも限らない。一般の市民を巻き込んだ、新たな儂智高論争の展開がここに見られる。

今一つ、2000代中期頃からの新たな動向として挙げられるのは、若い世代による儂智高研究の進展である。この点については次章で分析が避けられてきた諸問題にふれる際に検討しよう。

## 4 分析されてこなかった問題点

### 4.1 儂智高軍の問題点

従来中国での研究は儂智高政権を以て「民族統一的な政権」(白 2001)とするなど一枚岩的なものととらえられがちであった。『壮族簡史』(1980)で、左・右江各峒の力を団結することに注意しなかったため、右江 36 洞の首長は宋朝の利用するところとなったことを挙げている程度である。

しかし、実態は、婚姻関係(田州黄氏、特磨国)や領土・金品の交換条件の提示(結洞黄氏)によってようやく連合が実現したのである。当時、各氏族は独立性が強く、相互に対立しがちで、それゆえ宋朝から官職(散官)に釣られて簡単に離反したように思われる(塚田 1983)。滕元発『孫威敏征南録』に、儂智高が田州の太守黄光祚の母を妻とし、特磨国主に自らの母を嫁がせた記事が見える。結洞黄守陵に対しては、『涑水紀聞』13に、儂智高の、狄青に勝てば邕州を受けようという言と金珠を黄守陵に贈った記事が見える。『統資治通鑑長編』(以下、『長編』)173 皇祐 4 年 11 月戊申条に狄青の策として、儂・黄諸姓の首長を募って、これらに職を与えて繋ぎ止め、節制を聴かせしめようとしたことが見える。黄守陵や特磨道農氏は結局、儂智高側には附かなかった(『涑水紀聞』13)<sup>41)</sup>。

当時の左・右江流域の各政権の最小単位は「峒」であった。峒とは山間小盆地で、自然地形の上からも孤立性が高かった。その規模は小さく、極端に言えば 1 峒 = 1 氏族集団 = 1 羈縻州であった。人口は 1 州あたり 5,600 人 ~ 1,000 人以上(『文献通考』330 所引范成大「桂海虞衡志」「総謂之洞丁, 旧一州多不過五六百人, 今有以千計者」。儂智高の蜂起直後は 5,600 人, 孝宗朝に数千人)とごく小規模である<sup>42)</sup>。

范(1978)は、狄青軍側の離間策により、壮族内部の団結、群衆の支援を失わせた

とするが、離間策が容易に成功した背景には諸峒軍の寄せ集め軍という事情があったのである。このように諸峒が無条件で「連合」「団結」したわけではないことを、先の李微（1984, 注41）、尤中（1985）など少数を除いては中国側の論者は指摘をしておかなかった。その背景には儂智高の壮族の民族団結のシンボルとしての位置づけ、「民族英雄」としてのイメージに傷がつくことを恐れる風潮があったのではなかろうか。

この点、麦思傑（2009）は、儂氏は左江地区で多くの羈縻州首長の助けを得てそれらを間接的にコントロールをし、儂智高とは緩い政治関係にあったゆえ、狄青が儂智高を平定する過程で彼らと儂智高との矛盾をついたり、利をもって宋軍に引き入れて「叛乱」を平定したことを指摘している。近年の中国における新たな研究成果として評価することができよう。

## 4.2 儂智高の経済基盤

儂智高の経済基盤については、従来も金の産出による富裕さや交易場の開設の要求を宋朝に提示して拒絶されたことが指摘されたが、一步踏み込んだ経済基盤の検討がなされてこなかった。唐宋時代の左・右江流域における非漢族諸集団の経済的基盤についてはすでに拙稿（1983）で論じたが、重複を恐れずに、関係する点で重要なもののみを再度指摘する。

広源州産出の金は、「生金」である。『嶺外代答』7金石門「生金」にあるように、「金砮」（黄 1984）ではなく沙土の中から採集するものである。北宋期の邕州は全国屈指の産量を誇ったほどであった<sup>43)</sup>

南宋初期のことながら、『嶺外代答』7金石門「生金」には、首長「峒官」が一斗升に金を盛り博打に興ずるなど豪華な生活をし、金の力で「内外」と「交結」して有力になっていたことが記述されている。この金の取引を目的に多くの漢人が入り込んだが、亡命漢人の黄師宓は販金商人であるとともに、儂智高のプレーンの一人になったことに見られるように、非漢族にとって取引の相手のみならず情報源としての役割を果たした。

金による財力を背景に儂智高が、官営交易場「榷場」建設を宋朝に申請し、物資の流通の促進を企図したことは黄現璠（1983: 15, 93）が指摘した通りである。儂智高以降にも神宗熙寧9年（1076）頃に知広源州劉紀が太平寨での「和市」を願ひ出ている（『予章黄先生文集』22陶君墓誌銘）。神宗期の宋・李朝間の対立により一時中断したものの、以降北宋末にかけて回復し、南宋の高宗紹興年間に太平・永平寨に博易場が



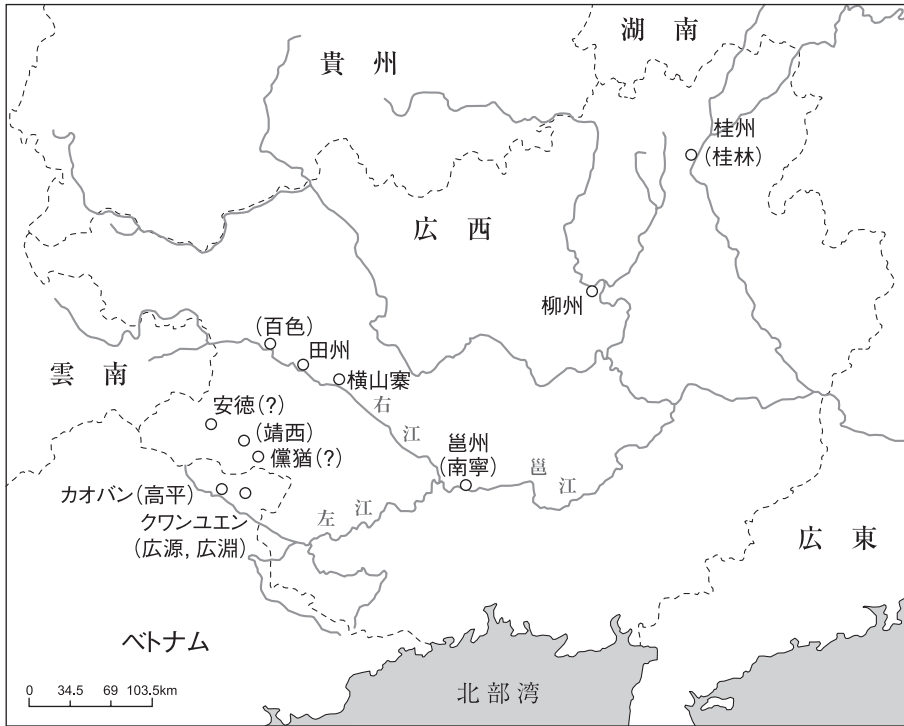


図1 関係地図（国境・省境は現在のもの）

設置され、交易が隆盛を迎えた。交易品として、とくに、銀（中国産）・塩（ベトナム産「私塩」）の中継地点になった<sup>44)</sup>。左・右江流域の非漢族首長たちは中継貿易で富裕になったものと推測される（塚田 1983）。

くわえて唐代以来、翡翠・珠・犀角・象牙といった南方の特産品の交易も続けられ、南宋初期には非漢族首長が交易の利益を集積独占した。

南宋になって、江北を金に占領された宋朝は「広馬」（大理馬）の輸入を、大理との中間に位置する自杞・羅殿の仲介によって、行うことになった<sup>45)</sup>。その際に、右江流域の首長たちは「招馬官」に任命され、官営の榷場の外に自宅に交易場を開設したり、馬綱の護衛をして利を得るなどして強盛を誇るようになり、「輿騎・居室・服用、皆擬公侯」（『文献通考』330 四裔 7 西原蛮伝所引「桂海虞衡志」）という様相を呈するほどになった。官営の榷場の開設によって、馬匹のみならず、麝香・胡羊・長鳴鶏・披氈・雲南刀・薬物ももたらされ、宋側商人が錦繪・豹皮・文書・諸々の奇巧の物をもたらした<sup>46)</sup>。

交易場を設置することによって、このように諸々の商品が集結することになり、結

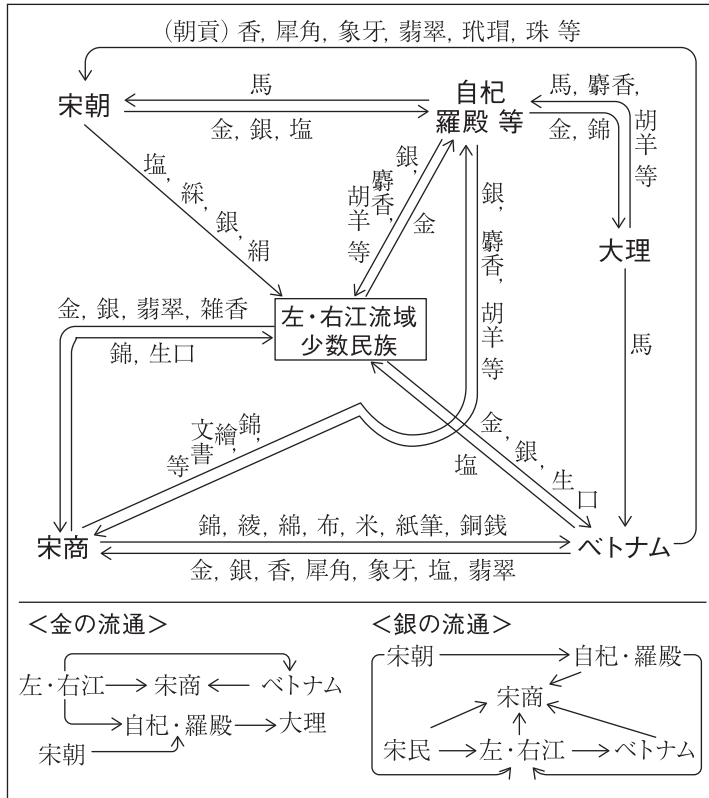


図2 中越・中滇における商品の流通（塚田 1983 より）  
 ・宋朝と宋商との間の商品流通は省略する。  
 ・ベトナムは、官・民ともに含む。  
 ・ベトナムの対宋朝貢の品目は、『嶺外代答』巻2外国上「安南国」に拠る。

果非漢族の首長の勢力が強大になったことからすれば、儂智高による榷場設置の申請の背景を想像することが容易であろう。このように、南宋初期には左・右江羈縻州をめぐる交易網が形成（図2 参照）されて羈縻州の首長が交易の利を掌握し強大になった（塚田 1983）が、儂智高はその先駆として、経済面からも十分な評価がなされるべきであろう。この点、前掲の麦（2009）は、儂智高蜂起後の塩・馬交易により、右江の非漢族首長が勢力を持ったことを指摘している。

#### 4.3 羈縻州対宋朝の権利義務関係の制度史的分析

従来中国における研究では、儂智高の蜂起を論じて、羈縻州と宋朝との権利義務をともなう制度的な関係史の枠組みを考えてそこに儂智高を位置づける試みがなさ

れてこなかった。

まず、宋朝の対羈縻州官制について、儂智高の蜂起以降、広南西路経略安撫司が常置され（『長編』173 皇祐4年6月己丑条）、その下に、広南西路安撫都監が新設され知邕州がその任に当たった（『長編』173 皇祐4年冬10月壬辰条、枢密副使王堯臣の言）。さらにその下に計6寨（右江の横山・温潤、左江の太平・古万・遷隆・永平）が設置され、熙寧2年以降、提挙都巡検使・知寨がこれを管轄する（『宋会要輯稿』兵4・峒丁・神宗熙寧2年5月11日の詔）、という統治体制になった。儂智高蜂起前は、知桂州広南西路転運使が置かれ、その下に知邕州が属するだけだったので、儂智高蜂起以降、官制面での整備が行われたと言えよう。

羈縻州数も増加した。儂智高以前は、宋太宗太平興国年間に30州（『太平寰宇記』166）、真宗景德年間に36峒に達した（『宋史』272 曹克明伝）。儂智高蜂起時は36（『涑水紀聞』13）だったのが、神宗熙寧6年には51（『長編』244 熙寧6年4月壬辰条）、高宗建炎元年には87に達した（『永樂大典』8507「南寧府志」所引「邕州志」峒丁）。儂智高鎮圧後に宋朝は集落の規模に応じて羈縻州県洞に分類した（『文献通考』所引「桂海虞衡志」によると、およそ50か処）が、その際に新たに羈縻州化された峒がかなりあった。神宗朝には対越強硬策を実施し、左・右江流域に積極策をとったため羈縻州数が急増した。南宋においてもほぼ80以上の羈縻州が置かれていた。羈縻州数の増加は中国王朝の影響力の一層の波及と王朝による統治体制の整備を反映しているであろう。

儂智高蜂起以降、宋朝の対羈縻州政策として辺防軍事力としての「峒丁」の徴発は重要である。その徴発は儂智高蜂起以前や蜂起時は臨時的に過ぎなかった。儂智高蜂起に際して臨時に峒丁を徴発し、宋朝軍に編入して儂智高軍に当たった（『宋会要輯稿』兵4-32・峒丁・皇祐4年夏）。蜂起以降、それが組織化された。ただし宋朝との距離に応じて段階があった。英宗治平2年（1065）には、左・右江の45峒から4万人余の壯丁を徴発して、2年に1回教閲し3年に1回兵籍を編む（『宋史』191 兵志5「邕欽溪洞壯丁」）として峒丁徴発制度の枠組みが策定された。峒丁を編籍する場合は、当該の峒の首長の手を通じて行われた（『宋会要輯稿』兵4-32・峒丁・神宗熙寧元年9月2日）。峒丁の訓練の度合いに応じて「首領」に俸給を給与した（『長編』283 神宗熙寧10年6月辛丑条）。さらに、知州や知峒＝首長を峒丁を率いる将（隊将・指使）として起用した（『宋会要輯稿』兵4・神宗元豊2年5月13日）。こうした施策の背景として、首長の力なしでは峒丁徴発による軍事制度の運営が困難であったであろうことが推測される。峒丁の起用が首長に委任されて以降、神宗元豊2年（1079）

に十万人（『長編』300 神宗元豊2年9月甲申条）、徽宗大観2年（1108）には20万人にもなった（『宋史』191 兵志5「邕欽溪洞壮丁」）。高宗建炎元年（1127）には56州峒19余万人を組織し得た（『永樂大典』8507「南寧府志」所引「邕州志」）<sup>47)</sup>。

後に南宋孝宗朝になると、この徵發制度は弛緩することとなり、峒丁の指揮権が完全に首長に委ねられ、宋朝側は1丁すら管理できなくなった（『嶺外代答』峒丁戍辺）。こうした経緯を辿るのであるが、儂智高蜂起以降、宋朝は左・右江諸峒の軍事力を利用して峒丁徵發による辺防体制の強化を行った。宋朝は羈縻州に「讓歩」するどころか、逆に羈縻州に対する統治を強めたと言えよう。ただし、峒の首長という既存の現地統治体制を活かした形ではじめて峒丁の徵發が可能になったのである。

従来、羈縻州の税の過重負担が指摘されてきた。それでは羈縻州の両税額はどのくらいだったのか。この点について、儂智高蜂起前は唐代以来定期的に朝貢する程度だったのが、儂智高蜂起以降賦課されるようになったものと思われる。形式上、諸峒の首長が宋朝に領土を差し出して宋朝の領土「省地」となったがゆえ課税される根拠が生じたように思われる（といっても実際のその土地の実質的な統治権は従来通り首長が持つことになる）。

南宋初期の両税額について、『永樂大典』8507 賦税「南寧府志」所引「建武志」所引「邕州志」に記事がある（記事の推定年代は孝宗隆興元年〈1163〉～淳熙12年〈1185〉）。

遷隆寨（5州峒：筆者、以下同）夏税錢280貫464文（1州峒あたり平均すると56貫92文。以下括弧内は筆者による）、秋糧米1,074石5斗7升3合（1州峒214石9斗）その他、生獠茶3千斤、麻47束9觔8兩

橫山寨（16州峒）夏税錢159貫130文省（1州峒9貫945文省）、秋糧米962石3斗8升（1州峒60石1斗4升）。草菓子4毬、土窄布160分

永平寨（8州峒）夏税錢108貫703文省。内35貫文省、係納馬22疋備錢（1州峒13貫588文省）。秋糧米508石3斗2升（1州峒63石5斗2升）

以上の3寨29州峒から計算すると、1州峒あたりの夏税26貫541文、秋糧112石8斗7升となる。これに対して直轄地の「宣化県」は夏税錢1,480貫727文足、秋糧米6,297石3斗3升2勺（4,260戸・18,456丁）（同「南寧志」より）。

直轄地と比較すると問題にならないくらい軽微である。両税は土地に課されるし、橫山寨・永平寨の場合、規定額に達しなくとも大体の額で可とするいわゆる「省陌」（陌錢）として優遇されていたので、無条件に比較するのは困難だが、上記の税額からすると多くとも羈縻州峒の負担は直轄地宣化県の10分の1程度ではなかったら

うか。それも峒丁に徴発された場合は免除された。この点について、『長編』203 英宗治平元年11月己卯条、知桂州陸誥の言に、峒丁を徴発する際に「免両江積欠稅物数万」とある。

繰り返すが、軽微な負担といってもあくまで儂智高の時代より後の南宋時代のことである。儂智高の時代は唐代後半以降同様、定期的な朝貢もしくはごく軽微な形だけの税程度であったと考えられる<sup>48)</sup>。

『文献通考』所引范成大「桂海虞衡志」によると「以諸洞財力養官軍」とあって、羈縻州からの税糧は提挙都巡檢の兵や寨兵の軍糧に充てられた。その寨兵は『嶺外代答』3 外国門下「寨丁」には「夫諸寨<sup>および</sup>廻居於諸峒之中，寨丁更戍，不下百人」とあって、諸峒から各寨に百人以上徴発された峒丁が当たった。僅かな人数の官軍あるいは峒丁が当たる寨兵の軍糧に充足すればよいということであった。この軍事力徴発も儂智高の時代の後のことである。従来、中国の研究者は「搾取」「圧迫」を強調してきたが、上記の税役負担の实情からすると、そうした指摘には無理があることは明らかである。

宋朝からの羈縻州首長への官位付与について、中国の官位は羈縻州首長が領内で地位を維持するのに必要で、儂智高も任官を希求した。ただし、『長編』244 神宗熙寧6年夏4月丙子条に、儂宗旦・儂智会を「將軍」に任じようとしたところ、「以夷人不知此官，欲乞一近上班行或副使」と言われたという。羈縻州の民がその価値を知っている官位でないとならなかったのである（といってもそれらは実権実務をとまわらない名譽的な官位に過ぎない）。宋朝側は彼らの申し出通りにしたようで、『宋会要輯稿』蕃夷5 広源州蛮，神宗熙寧6年4月3日に、儂宗旦が桂州都監，儂智会が供備庫副使に任官された。『文献通考』「桂海虞衡志」には、儂智高の蜂起以前は「知州補授，不過都知兵馬使，僅比徽校」に過ぎなかった。蜂起に際して「洞人」が戦功を立て「始有補班」，元豊以後、「中州官」に任ぜられた。「近歲，洞酋多寄籍内地，納粟補授，無非大小使臣。或敢詣闕，陳獻利害，至借補閣職，与帥守抗礼。」として、儂智高後次第にエスカレートして南宋孝宗期になると閣職に任じられて経略安撫司に「抗礼」する者さえ出現するに至ったという。なお、当然、彼らに付与された「知州」「監州」「知県」「知洞」等の実権をとまなう行政職は別である。これらは上記の軍事・両税の徴発の際に職務の根拠になったであろう。羈縻州首長が武散官・武階官・環衛官に任じられた事例が『長編』『宋会要輯稿』等で25例ある。そのうち14例が神宗朝に集中している。武階官としては内殿崇班，西頭供奉官，左班殿直，三班奉職，三班借職，武散官としては定遠將軍，寧遠將軍，忠武將軍，環衛官としては左監門衛

將軍、右千牛衛將軍といった官が見える。もちろん首長に賦与された官位は名譽的な散官であって、実権実務を伴わない。「中州官」といっても名譽的な官であったのである。

この点について黄国安（1982）は、羈縻州には賦税を課さないし、広南西路の正州に対しても賦税は比較的輕微とした。麦（2009）は朝廷の左江羈縻州諸蛮に対する統治は「ただ名義上に過ぎない」とした。さらに儂智高の蜂起前は朝廷が諸酋が辺境を騷擾させないように、毎年、塩、彩（綵）<sup>いろぎぬ</sup>を賜予した。蜂起後、首長の実力に応じて官職に任命し新たな辺境軍事制度を樹立したという。

杜樹海（2012）は、広源州等の地の酋領と宋・交趾との関係は薄弱で、「方物進貢」と「官職授与」の象徴的な関係にあったこと、またこの関係も流動的で、彼ら自身の利益の需求によって変化したことを指摘している。

11世紀50年代以前は広源州等の地の酋領と宋朝・李朝ベトナムとの結びつきは非常に緩かった。多くとも方物進貢、授与官職の象徴的關係に過ぎないし、その關係は變動的であった。儂智高がその父儂存福とともにベトナム李朝から官位を得たように、中越双方と同時に關係を持つこともあり得た。「国家」「国籍」の觀念は、中世史、とくに羈縻州には通用しにくかった。この点、前掲のように、儂智高在世の時には明確な国界はなく、儂智高死後26年後に宋朝と李朝の間で国界を画定された。それも近代的な意味での国境ではなかったのである。

本章では、従来分析されてこなかった問題点を明らかにした。儂智高と左・右江羈縻州の諸勢力とは無条件で「連合」、「団結」したのではなく、儂智高軍は「寄せ集めの軍隊」に過ぎなかったこと、經濟基盤としてとくに南宋時代になって当該地域には交易網が形成され、羈縻州首長が交易の利を掌握し強大になったこと（儂智高の時代にもそうした動きはあった）、宋朝は羈縻州に対して辺防軍事力峒丁の徵發や税の徵收を行ったが、羈縻州側から見ればいずれもごく輕微な負担に過ぎなかった。宋朝は羈縻州首長の好む官位、ただし実権をとまわらない名譽官として散官の位を与えた。

中国での多くの研究は長く「王朝による封建搾取・圧迫」史觀から抜け出せなかった。儂智高を絶対的な善玉とし、「壮族の民族英雄」として評価し、これを鎮圧した王朝側を悪玉として、その階級的・民族的な搾取・圧迫の問題に固執し続けてきた。近年の研究で、ようやくそうした欠点を克服して実情が解明され始めた。

ただし、従来の研究を回顧、総括したうえで、その反省の上になつて問題点を一つ一つ洗い出して儂智高問題をさまざまな角度から全面的に見直して、民族政策に起因するであろう過度に主觀的情緒的な民族感情やそれらに対する政治的配慮には一定の

距離を置いて、純粋に学術的に検討する作業はまだ着手されていないのが現状である<sup>49)</sup>。

## 5 整理

本稿で検討してきたことを整理する。1949年以前に儂智高の事績が論じられ始めたが、人民共和国後の中国学界では無視された。人民共和国では1950年代以降、儂智高問題が盛んに論じられるようになった。

1950年代後半から1960年代は、マルクス主義的發展段階論にそった奴隸制・封建制論争、正義・非正義論争がなされた。奴隸制段階にあつて非正義として儂智高を否定した論者は、儂智高の蜂起を宋朝とは別の国家を建てる分裂割拠として位置付けた。肯定論・否定論に関わらず、国家の統一・領土問題、団結が問題関心とされた。否定論者であっても、儂智高が「分裂割拠」をした点で祖国の統一と諸民族の団結に不利であったものの、蜂起後の宋朝の政策によって国家の統一が保たれ、民族間の交流と団結が強化されたという論点では肯定論者と共通していた。この論争は『壮族簡史』（1980）で一応の終止符が打たれた。

ついで1979年の中越戦争の時期以降、儂智高の国籍問題が論じられた。1980年代に広西では儂智高中国人説が有力となり、ベトナムの侵略から領土を防衛したという意見が多数派を占めた。ただし他省区の学者の間では儂智高ベトナム人説も見られ、その場合は儂智高挙兵には批判的であった。儂智高の「分裂割拠」については、宋朝の領土内に独立国を樹立したものの、分裂ではないことを主張する学説が相次いで登場した。この時期は儂智高「民族英雄」観がまだ固まっていなかった。黄現璠は全面的に儂智高を以て「英雄的人物」としたが、挙兵前の時期に限定して「民族英雄」とする論調も見られた。さらに、宋朝仁宗皇帝に対する批判に現れたように記述が往々個人の感情に陥りがちであった。加えて、儂智高を「愛国者」と位置付け、その戦争を「愛国行動」とするなど、現在のナショナリズム的思想を過去に投影しようとする動きが見られた。1980年代後半には「中華民族」と関わらせた論調が生じた。

1980年代に脱毛沢東化、改革開放政策の進展につれて、儂智高論争に関するパラダイムが徐々に転換していった。そして、1990年代後半になると、「民族英雄」としての評価が定着した。その評価は2000年の万揆一論文事件を契機に一層定着した。愛国主義思想の普及という時代の風潮を反映して儂智高の「愛国者」「愛国戦争」としての位置付けの動きが強まった。また、中国人の東南アジアへの関心の高まりに応

じて、隣省の雲南やベトナムをはじめとする東南アジア大陸部などに儂智高研究の地域的な広がりが見られるようになった。さらに、研究者の裾野が省区のみならず州県に広がった。環境の異なる広西と雲南の壮族が「民族英雄」儂智高を通して壮族としての一体感を創出することになったよう推測される。

学者のみならずメディア記者が参入して研究の裾野がさらに拡大した。儂智高の「分裂割拠」が政治問題として一層微妙な問題になるなかで、白耀天の地名比定など新たな研究の深まりが見られた。

2000年代、ウェブサイト普及後に専門家以外の知識人や一般民が参画して、かつ地方からの論評が続々と出現し研究の裾野が大いに広まった。農氏・岑氏の多くの人々がウェブサイトを通じて、儂智高論争に参加するようになった。そこに寄稿する人は研究者とは限らず、また地域も広西の広範囲に及び、壮族とも限らない。一般の市民を巻き込んだ、新たな儂智高論争が展開されるようになった。

このように、時代の変化に応じて、儂智高峰起は、ごく限られた史料を使いながらも、絶えず異なった解釈をされ続けてきた。儂智高をめぐる研究にはその時代の思潮が映し出されてきたのである。そして、そうした研究の変遷を経て、また、分裂割拠の位置づけという難題にしばしば直面しながらも、とくに民族学において、中国の領土の統一、民族の団結という政策を概ね踏み外すことはなかった。壮族出身者や広西・雲南文山州以外の学者、歴史学者は異なる意見を提出したものの、中国民族学は概ね、国家の民族政策に寄り添う方向を志向し続けてきたのである。

分析されてこなかった問題も少なくなかった。たとえば儂智高と左・右江羈縻州の諸勢力とは無条件で「連合」、「団結」したのではなく、儂智高軍は「寄せ集めの軍隊」に過ぎなかった。経済基盤として南宋時代に交易網が形成され、羈縻州首長が交易の利を掌握したが、儂智高の時代にその端緒が見られた。宋朝は羈縻州に対して軍事力の徴発や徴税を行ったが、羈縻州側から見ればいずれもごく軽微な負担に過ぎなかった。宋朝は羈縻州首長に官位、とくに実際の権限をとまわらない散官を与えた。中国での多くの研究は長く「王朝による封建搾取・圧迫」史観から抜け出せなかった。

中国では、儂智高を「壮族の民族英雄」として評価し、これを鎮圧した王朝側を悪玉として、その階級的・民族的な搾取・圧迫を批判し続けてきた。近年の研究で、ようやく実情が解明され始めた。ただし、従来の研究を踏まえて儂智高問題を全面的に見直し、民族感情や政治的配慮に一定の距離を置き、純粋に学術的に検討するような作業はまだ本格的には着手されていない。今後の研究にどのような新たな展開が見られるのであろうか。中国民族学の動向が注視されるところである<sup>50)</sup>。



## 謝 辞

本稿で用いた資料の一部は国立民族学博物館外国調査旅費（平成26年度）によって得られた。また、国立民族学博物館共同研究「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」（代表者：長谷川清）の第一回研究会（平成26年10月18日）にて行った口頭発表を元に行っている。国立民族学博物館、および共同研究会にて貴重なご意見をいただいた出席者各位に謝意を表す。

## 注

- 1) 「壮学叢書」の目的は、壮族に関する知識を通して、壮族のアイデンティティを再認識すること、現代化のための精神的な原動力となることにある。
- 2) 後述するように、壮族は、1952年12月の桂西僮族自治区の誕生に合わせて、国家政策により「創出」された少数民族で、1950年代の「民族識別工作」政策の過程をも経ている。その意味からすれば、農智高が現在の壮族につながる「民族的範疇」に属するといっても、厳密な意味で宋代広西左・右江流域に民族として「壮族」がすでに存在していたというわけではない。この点は議論の焦点ではないので、本稿ではひとまず措いて、暫定的に農智高を壮族の「先民」の範疇に属するものとして扱う。
- 3) 農智高の民族的帰属については劉錫藩（1934）の記事に基づき、「僮」としている。
- 4) 小川は河原（1959）を引用していない。なお、小川は黄蔵蘇（1958）により、農智高が今日の僮族であるとしている。
- 5) 引用される場合でも劉介（錫藩）の『嶺表紀蛮』に留まっている。しかも批判的な評価がなされがちである。范宏貴（1989）によるその評価については塚田（2005）を参照。
- 6) 粟冠昌（1963）によると、左・右江流域の土官は僮族であるが、歴代封建王朝の民族蔑視と強制的な同化政策の結果、土官が家譜を偽造し漢人の後裔としたものとしている。河原説は、1992年に谷口房男によって公的に中国に紹介され（谷口1992）、2002年に河原の農智高研究とともに「20世紀の壮学研究」の一つとして紹介されるに至った（覃2002）。河原（1944）の系譜偽造の問題は、さらに鄧（2009）でも日本の学者がこの問題に早くから注目されていたとして評価がなされている。ただし、河原（1959）は中国ではまだ正当な評価がなされていない。
- 7) この場合の「民族」は人民共和国以降の「民族」概念とは異なり、「五族」が提唱されていたものの「国民」程度の意味に過ぎない。
- 8) 『申報』1940年4月13日によると、西南少数民族の名称に虫獸鳥の偏旁を用いている現状について、当時の中央研究院・中央社会部・教育部の代表が座談会を開催し、①1939年8月に国民政府が発した470号訓令にそって、その民族が生長した所在地の名称で呼称すること、②学術研究上の便宜のために、人偏に改めるか同音の仮借字を用いること、③少数民族の称谓で生活習慣に基づいて形容されているものは廃止すること、の3点が提起された。卜松論文はこの提起を受けて書かれた。
- 9) 費孝通が後に、「土人は苗瑤と同じく少数民族に属するとは承認せず“僮語を話す漢人”であると自認して」いたことを指摘している（1952: 29）が、卜松論文の存在と意義は従来注目されてこなかった。
- 10) 本節で取り上げる人民共和国以降の中国における農智高蜂起に関する論文については、研究動向とそこに見られる変化の検討を主目的とする本稿の主旨に沿い、要点のみを挙げ、史料の考証は省略する。使用されている史料は、一次史料として『統資治通鑑長編』『宋会要輯稿』などの編纂史料、および『涑水紀聞』『武溪集』『孫威敏征南録』『桂海虞衡志』（『文献通考』引用文を含む）などの文集、二次史料として『宋史』『宋史全文統資治通鑑』などで、とくに目新しい史料は使用されていない。
- 11) なお、「故事伝承」の内容についてはふれられていない。また、劉介同様、黄は土官につ

- いて、農智高蜂起に狄青の部将として来たとし、士官の系譜に記載されている歴史を事実として理解している。
- 12) 1958年3月5日に広西全土を含む広西僮族自治区が成立した。僮族は1965年10月に強壯・健康を示す語義の良い「壮族」に改称されたが、以下、煩を避け引用文を除いて「壮族」と表記する。
  - 13) 奴隸制論者以外に、歴史学者によって農智高の分裂割拠が指摘された。たとえば剪伯贊1963(1979)は、「僮族人の農氏の首領」農智高は嶺南に「独立の小王国」を樹立しようと企図したとしている。
  - 14) 後述の荒木敏一(1984)は、農智高は科挙の第一段階の府州での解試に応試したが、第二段階の中央の礼部で行う省試に合格者リストを送られるまでには至らなかったと推測している。となると第三段階の皇帝が殿前で覆試をする殿試の段階には至っていない。
  - 15) この間の経緯については、たとえば岡田英弘(1979)を参照。
  - 16) 粟が壮族出身であることもおそらく農智高評価に影響したであろうと想像される。
  - 17) こうした経緯を無視して、この記事が農智高の国籍問題の論争的にする(後述の白2000a, 羅2008・2012など)には無理がある。なお、莫家仁(2000)は、この記事について、政治的必要性のため行なった「歪曲的宣伝」としている。莫(2000)によると、この記事は『壮族簡史』が編纂され出版されようとした時に出現したため、編纂者たちが驚愕したこと、人々が新聞社に(抗議の:筆者)手紙を書いたこと、またこれを契機に農智高ベトナム人説に反駁する論者が多く現れ、国籍論争が過熱したことを指摘している。
  - 18) 黄振南(1983)は、「労働人民を痛苦から解放するスローガンや闘争綱領がなかった」のが農智高の致命的弱点としているが、現代の革命闘争を過去に投影しているに過ぎない。
  - 19) 韋文宣も壮族出身である。
  - 20) すべての少数民族の社会を、人民共和国内成立前の時期に基づき、原始共同体制、奴隸制、封建領主制、封建地主制の発展段階に分類した(国家民委民族問題五種叢書編輯委員会<中国少数民族>編写組編1981)ことはよく知られている。また、『壮族簡史』(1980)などの記載では壮族社会が歴史上そうした発展段階を経てきたとする。こうした発展段階論に関する公式の見解は今も変更されていない。
  - 21) 以前にも李干芬(1985)など大理国をはじめ雲南との関係を検討した研究があったが散発的であった。なお、何正廷は雲南西畴県の壮族で、当時雲南民族事務委員会の幹部であった。後に雲南省社学会秘書長。
  - 22) 農賢生は富寧県壮族で、富寧県史志弁公室主任。范主編(2005)には、農賢生の富寧県における農智高の母阿儂ゆかりの伝承と儀礼の紹介(農1997)、農智高のラオスへの移住伝承(農1998)、富寧県における農智高伝承(農1998)などの論文が再録されている。他に曾昭富(1997)、顔成録・元文躍(1997)の『広南古今』(広南県志叢書)に収録された論文が再録されている。
  - 23) 何(2003)は、農智高が元江に亡命し、その後裔が那姓に改めたこと、またその部隊は壮族(農人、沙人)から傣族(の支系)「傣仲」に改め、傣族の中に融合したこと、さらにラオス、ミャンマー、タイ国のタイ系諸民族の構成部分になったことを指摘している。なお、「六月節」「七月節」儀礼は羅彩娟(2012)に詳しい。
  - 24) 前掲の伊藤(2002)によると、農智高はベトナムでは「英雄」視されにくいという。范主編(2005)のベトナム研究者の中国語への翻訳論文が要点だけであり、その根拠に問題があるが、それでも黄良論文はそうした潮流の中で注目される。
  - 25) 1994年8月に広西壮学会会長余達佳とその一行がタイを訪問し、同年9月にはタイ国文化委員会顧問が代表団を率いて広西民族学院を訪問した(范1995)。
  - 26) たとえば、伊藤(2002)は、広西靖西県三套集成領導小組編1987『靖西民間故事集第1集 中国民間故事集成広西巻』の、農智高に関する伝説の一つを紹介している。この点に関連して、2000年には百色市の凌春輝が靖西県における農智高伝承の研究を発表している(凌2000)。
  - 27) 莫家仁の指摘の原因となった報道が、どのメディアによっていつなされたのかは確認がとれていない。政府と結びついた省区の機関紙としてはあるが、これまでも1979年4月の『雲南日報』の記事や1960年代にも黄現璠らの論文が『広西日報』に掲載されてきた。しかし、1990年後半以降、たとえば黄金安の論文「農智高死因之謎」が『南寧日報』1996年9月27日に掲載される(范主編2005:494-495)など、メディアへの掲載がさらに進められたことが指摘されよう。

- 28) 万揆一は漢族で、雲南省・昆明市地方志学会会員で、地方志の編纂や新聞界で活躍した。
- 29) 羅 (2009) によると、『雲南日報』は2002年5月15日に「北宋民族英雄農智高」を掲載し、農智高の歴史功績を肯定し、「北宋勇士入滇緝叛首」の却下訂正をしたというが、農鼎升「北宋民族英雄農智高」(『雲南日報』2002年5月15日)を掲載して農智高の功績を肯定したものの、前記事の「却下訂正」は明記されていない。
- なお、農鼎升の論旨は『広西民族研究』でより詳細に展開された(農2002)。
- 30) 壮族は広西では少数民族総人口のうち84.45パーセントと圧倒的多数を占めている(広西壮族自治区統計局・広西壮族自治区人口普查弁公室編2012)が、雲南省においては少数民族総人口のうち7.92パーセントに過ぎず、ハニ族、ペー族、タイ族よりも少なく(雲南省人口普查弁公室・雲南省統計局編2012)、いくつかの人口の多い少数民族の一つでしかない。
- 31) 農智高の蜂起の鎮圧後、宋朝の政策で農姓が国姓である趙姓に変更された(『文献通考』330范成大「桂海虞衡志」)。また、先述のように、広西の壮族の間で、祖先が農智高を鎮圧した狄青の軍隊に所属して広西に移住してきたという伝承が広西の多くの地域に広まったことも農智高伝承の残る地域の限定性に関わっている。
- 32) ただし、ベトナム李朝の圧迫に反対する闘争の点では「正義」で「現地の人民の願望と要求を代表した」といい、農智高の蜂起の要因は「野心」「割拠政権の建立」のみではないことを指摘している。
- 33) 『民族英雄農智高不容誣蔑——文山州委統戰部召開農智高問題座談會研討會綜述』(馬關県壮学資料滙編第3集)。なお、同資料は未見である。
- 34) 荒木の推論は、農智高が解試をパスして省試または殿試に落ちたのではなく、解送者リストから除外されたとする点で、白耀天(2001)らの見解と異なっている。
- 35) 茂木敏夫(1995)によると、清末19世紀末において新疆・台湾両省の建省の動きのころから、日露の軍事的圧力と近代的な国境・領土支配に対峙するために、満州・藩部・直轄省を絶対的な国境として引き直し、版図全域の支配を再編し近代国家「中国」として統合して行く方向へ踏み出した。それまでは国境線は版図として暫定的なものでしかなかった。
- 36) 梁は壮族で、中央民族大学副学長の要職にあった。
- 37) 注31のように農智高蜂起の鎮圧後、宋朝の政策で農姓が国姓である趙姓に変更された(『文献通考』330范成大「桂海虞衡志」)。また宋軍に殺されずに生存を得るために「イ」を取った「農」姓が使われるようになったという(范2000)。
- 38) 『王文成公全書』14「処置平復地方以図久安疏」に、「其先祖岑伯顔者、嘗欽奉太祖高皇帝勅旨、岑黄二姓、五百年忠孝之家」とあり、岑氏は宋代以降、黄氏とともに士官に任じられてきた。しかし、『明孝宗実録』222弘治18(1505)年3月甲辰、広西泗城州土官族人岑九仙の上奏に「自始祖岑彭以来、世襲士官」とあり、嘉靖『広西通志』52に「士官岑姓、自叙漢征南將軍武陰侯之後」とあり、明代15世紀後半、成化年間以降に権威を高めるために、すでに始祖の起源を早期の漢代(岑彭)に遡る現象が生じていた。
- 39) 白耀天は、族譜内容の不自然さから岑仲淑の実在性に疑義を呈している(谷口・白1998)。また、白は籍貫を問題にして、岑彭伝承よりも岑仲淑伝承のほうが合理性を持つように推測しているが、この点は、岑仲淑伝承が先にあり、後に明代成化年間以降に権威を一層高めるために時代をより遡って岑彭に起源を求めようになったと考えるのが自然であろう。
- なお、岑仲淑をはじめ、こうした宋代に南遷した漢人という始遷祖を伝える世系は、前掲の河原(1944)の指摘するように作為である。
- 40) 岑氏は5支系があって全国に広く居住しており、浙江、広東(陽春、陽江県)、香港など宗親会が各地で組織されているようである。2013年3月に岑彭公の陵墓修繕事業が行われたが、その際に、広西のほか、広東、雲南、福建、香港の岑姓が寄附をしている。
- 41) この点について、李徹(1984)は、黄守陵をはじめとして「邕州三十六峒蛮」は農智高軍の邕州、広州進攻に参加せず、農智高軍は広源州の壮族人と邕州以降に参加した鬱江(西江)流域の漢族人民のみで、したがって「民族闘争」の色彩は非常に薄く、階級闘争の色彩が顕著であるとしている。
- 42) 王安石『論邕管事宜』にも、「大州峒有五百人、其次不下二三百人」とある。
- 辺防軍として「峒丁」19余万人を組織した高宗建炎元年(1127)でも平均1州峒3,426人(『永樂大典』8507「南寧府志」所引「建武志」)である。農智高が横山寨を攻めたときの兵力は5,000人であったので、「広源道」十州や田州等の援軍を入れても、「寄せ集めの軍隊」に過ぎなかったのである。

- 43) 『宋会要輯稿』食貨 33-7・「坑冶上」では、その金の産出量は山東の萊州・登州に次いで全国3位である。
- 44) 宋朝側はベトナムから塩を購入して官塩と混ぜて販売していたが、非漢族がその方式を真似て塩を密売し対価として銀を得るようになり、「広馬」(大理馬)交易の際の銀価の下落を招いたという。
- 45) 広南西路における馬政、とくに大理馬導入の展開については、藤本光(1952, 1953, 1955)が研究の先鞭をつけた。後、筆者(1983)による右江非漢族と広馬交易の関連に関する研究を経て、岡田(1989, 1990a)が馬政をめぐる広範な諸問題を研究した。
- 46) 『嶺外代答』5「邕州横山寨博易場」。なお、この記事の続文には、招馬官が非合法に交易場を自宅に置き税を軽くしたので、官営の交易場に入るものは10に1、2のみになったことが記述されている。
- 47) ただし、羈縻州は峒丁・熟蛮地区とその外部の「婦明州峒」地区に区分された。前者は宋朝に領土を差し出してその土地が形式上宋朝の領土「省地」とされた地域である。動因された峒丁19万人のほとんどが前者で、後者は1万人余に過ぎなかった。左・右江地域の峒丁が軍事編成組織として宋朝によってどのように利用されたかの変遷過程については、岡田(1990b)が詳細に論じている。
- 48) 『長編』120景祐4年(1037)2月甲寅条に、「除邕州管下谿洞諸州天聖五年以前所逋賦税」とあって、仁宗の治世、儂智高蜂起以前の天聖五年(1027)に羈縻州にも課税されていたらしいことが推測される。
- 49) さらに従来問題とされてこなかった点として、崑崙関帰仁舖の戦いで騎馬隊を率いて歩兵の儂智高軍を撃破し儂智高戦争に決着をつけた宋将狄青の扱いが挙げられる。狄青は「鎮圧儂智高第一将」(『南国早報』2009年6月25日)など、宋の名将として称賛されることが多く、その無能を批判された仁宗皇帝とは対照的に批判の対象とされてこなかった。しかし他方で、狄青信仰は歴史的に人々の間には受け入れ難いものがあつた。たとえば騰(2011)によると、「狄青廟」があり、崇左地区の「平話人」が祖先が狄青に従軍したとして祭祀をしてきた。統治者階層が廟を建てて狄青を神霊化して民衆に忠君意識を浸透させようとしたが、壮族地区の民間では受け入れられにくかつた。壮族人民は儂智高を民族英雄と見做し崇拜してきたからである。しかし、壮族の間に狄青従軍移住伝承が広がっている(松本1990)のであり、狄青の評価についてそのことがどのように影響しているのか、検討が必要であろう。
- 50) 儂智高に関する歴史をめぐる資源化の進展について、中越国境地域、たとえば天等県金洞郷福利村「都軍廟」「峒信廟会」の祭祀(唐2012)、南天国の故地とされる靖西県安德鎮における「紀念民族英雄儂智高活動節」(羅2013によると2005年以降毎年開催されているという)、靖西県湖潤郷坡州の「儂智高洞」、さらにベトナム・カオバン省における儂智高廟の活動など、民間伝承と儀礼活動の分析について、さまざまな主体がどのように関与して進められているのか掘り下げていく余地が多分にある。伊藤(2002)の指摘するように、儂智高伝説の残る地域は広西部の一部に偏っているが、限られた地域であっても、歴史の資源化という側面からの検討が今後必要であろう。

また、本稿では儂智高という壮族にゆかりの深い歴史的人物を素材としたが、華南の他の少数民族の場合との比較という点も重要である。この点も将来に残された課題である。

## 文 献

### 【日本語文献】

荒木敏一

1984 「北宋儂智高応挙考——愈樾曰く「儂智高も亦た科挙の士なり」と——」『撰大学術』B, 人文・社会篇 2: 1-19。

伊藤正子

2002 「儂智高の語り方——中越国境少数民族の「英雄」と国家」『東洋文化研究所紀要』142: 79-108。

小川 博

「宋代の儂智高の事蹟」(1: 1965『中国大陸古文化研究』1: 49-58, 中国大陸古文化研

- 究会, 2: 1965 『同』 2, 15-25, 3: 1966 『同』 3, 27-30, 4: 1967 『同』 4, 21-36)。
- 岡田英弘  
1979 「鄧小平の中国——日中, 米中, 中越, 台湾関係」『自由世界』1979年5月号: 12-22。
- 岡田宏二  
1979 「儂智高の反乱をめぐる諸問題」『大東文化大学紀要——人文科学』17: 93-112。  
1989 「南宋高宗時代広南西路における馬政——南宋時代広南西路の馬政研究(上)」『東洋研究』92: 145-189。  
1990a 「南宋孝宗以降広南西路における馬政の展開——南宋時代広南西路の馬政研究(下)」『東洋研究』93: 21-63。  
1990b 「宋代広南西路左・右江地域の峒丁について」『大東文化大学紀要——人文科学』28: 333-347。
- 河原正博  
1944 「廣西蛮酋の始遷祖に就いて——左・右江流域を中心として」『南亜細亚学報』2: 109-156。  
1959 「儂智高の叛乱と交趾」『法政史学』12: 25-47。
- 桑原隲藏  
1935 『蒲寿庚の事跡: 唐宋時代に於けるアラブ人の支那通商の概況殊に宋末の提举市舶西域人』東京: 岩波書店。
- 谷口房男  
1975 「唐・宋時代の『平蛮頌』について——嶺南少数民族漢化過程の一断面」『白山史学』18: 27-52。
- 谷口房男(覃 義生訳)  
1992 「日本の壮族史研究動態」『広西民族研究』1992年第2期: 122-126。
- 谷口房男・白耀天  
1998 『壮族土官族譜集成』南寧: 広西民族出版社。
- 塚田誠之  
1983 「唐宋時代における華南少数民族の動向——左・右江流域を中心に」『史学雑誌』92(3): 40-66(中国語訳: 「唐宋時期華南少数民族の動向——重点考察広西左右江流域の少数民族」上下, 上: 『民族訳叢』1986年第1期: 42-46, 下: 『同』第2期: 46-54)。  
2000 『壮族文化史研究』東京: 第一書房。  
2005 「中華人民共和国成立前後における壮族へのまなざし」長谷川清・塚田誠之編『中国の民族表象——南部諸地域の人類学・歴史学的研究』pp. 93-121, 東京: 風響社。
- 藤本 光  
1952 「南宋の広馬博易と西南諸国の動静に就いて」『東京学芸大学研究報告』3: 42-45。  
1953 「南宋廣馬考——その発展と終局とについて」東京教育大学『東洋史学論集』1: 205-215。  
1955 「続南宋広馬考」『史潮』57: 1-13。
- 牧野 巽  
1985 「広州人における南雄珠璣巷伝説とその意味」牧野巽著作集第5巻『中国の移住伝説・広東原住民族考』, pp. 248-267, 東京: 御茶の水書房。
- 松本光太郎チロウ  
1990 「壮族の移住伝説とエスニシティ」阿部年晴・伊藤亜人・荻原眞子編『民族文化の世界(下)——社会の統合と動態』pp. 505-523, 東京: 小学館。
- 茂木敏夫  
1995 「清末における『中国』の創出と日本」『中国——社会と文化』10: 251-265。
- 【中国語文献】
- 白 耀天  
2000a 「儂智高は今広西靖西県人——關於儂智高国籍研究之一」『広西民族研究』2000年第2期: 94-97。  
2000b 「元豊二年十月以前広源州為宋朝領土辨証——關於儂智高国籍研究之二」『広西民族研究』2000年第3期: 99-108。  
2001 「“内寇”? 帝不點頭誰作主——關於儂智高国籍研究之三」『広西民族研究』2001年第

2期：111-115。

- ト 松  
1949 「狄青征服的是什麼民族？」『广西日報（南寧）』1949.3.7。
- 陳 維剛・李 干芬・李 維信  
1961 「儂智高起兵性質問題的探討」『广西日報』1961.7.31。
- 鄧 金鳳  
2009 「壯族認同“漢裔”現象研究回顧与展望」『广西民族研究』2009年第1期 88-95。
- 杜 樹海  
2012 「北宋儂智高起事再研究——以起事前後广西左・右江上游区域歷史的轉變為中心」『广西民族研究』2012年第1期：85-90。
- 費 孝通  
1952 「關於广西僮族歷史的初步推考」『新建設』1: 29-33。
- 費 孝通等  
1989 『中華民族多元一体格局』北京：中央民族学院出版社。
- 郭 振鋒・張 笑梅  
1999 「論宋代儂智高事件和安南李朝与北宋之戰」『河南大學學報（社会科学版）』第39卷第5期：5-9。
- 国家民族問題五種叢書編輯委員會<中国少数民族>編写組編  
1981 『中国少数民族』北京：人民出版社。
- 剪 伯贊主編  
1963 (1979) 『中国史綱要』第3冊，北京：人民出版社。
- 韓 肇明  
1979 「略論儂智高起兵的幾個問題」『中央民族学院學報』1979年第4期：50-57。
- 范 宏貴  
1962 「儂智高起兵反宋不是歷史上的一股逆流——与陳維剛同志商榷」『广西日報』1961.9.25。  
1978 「捍衛祖国疆土的儂智高」『广西民族学院學報』1978年第4期：58-62。  
1989 「研究壯族的今昔」范宏貴・顧有識『壯族論稿』pp. 1-37，南寧：广西人民出版社。  
1995 「儂智高及其影響」『广西民族研究』1995年第2期：101-106。  
2000 『同根生的民族——壯泰各族淵源与文化』北京：光明日報出版社。
- 范 宏貴主編  
2005 『儂智高研究資料集』〈壮学叢書〉南寧：广西民族出版社。
- 何 正廷  
1995 「關於儂智高領導的民族戰爭」『關於陶宏・陶真歷史文化方面的史籍』タイ国法政大學泰学研究会与教育部国家文化委員會（范 宏貴主編 2005: 477-483）。  
2003 「儂智高率部属落籍元江行踪考」『广西民族研究』2003年第2期：111-116。
- 何 正廷主編  
1998 『雲南壯族』北京：民族出版社。
- 广西壮族自治区統計局・广西壮族自治区人口普查办公室編  
2012 『广西壮族自治区2010年人口普查資料』1，北京：中国統計出版社。
- 黄 国安  
1982 「論儂智高」『印支研究』1982年第1期：21-26, 7。
- 黄 現璠  
1957 『广西僮族簡史』（初稿），南寧：广西人民出版社。  
1962 「儂智高起兵反宋是正義的戰爭」『广西日報』1962.4.2。  
1983 『儂智高』南寧：广西人民出版社。
- 黄 現璠・黄 增慶・張 一民  
1988 『壯族通史』南寧：广西民族出版社。
- 黄 藏蘇  
1958 『广西僮族歷史和現狀』北京：民族出版社。
- 黄 振南  
1983 「試述儂智高反宋的歷史背景」『中央民族学院學報』1983年第4期：24-28, 35。  
1984 「儂智高」莫乃群主編『广西歷史人物伝』第6輯（范 宏貴主編 2005: 424-431）。  
1986 「又談広源州和儂智高」『广西民族研究』1986年第1期：53-58。

- 李 干芬  
1985 「儂智高到大理的幾個問題探討」『廣西民族研究』1985年第1期：55-60。
- 李 微  
1984 「儂智高反宋問題淺論」『嶺南文史』1984年第1期：100-106。
- 凌 春輝  
2000 「靖西儂智高傳說的美學內涵——靖西民間文學研究之二」『廣西右江民族師專學報』13(3): 32-36。
- 梁 庭望  
2001 「論儂智高反宋的實質：保境愛國正義戰爭」『廣西民族研究』2001年第4期：94-100。
- 劉 介（劉錫藩）  
1934 『嶺表紀蠻』上海：商務印書館。  
1940 『廣西特種教育』廣西省政府編譯委員會。
- 羅 彩娟  
2008 「記述與表述：馬關峯壯族眼中的儂智高與楊六郎」『廣西民族研究』2008年第4期：174-186。  
2009 「儂智高研究綜述」『廣西民族研究』2009年第3期：96-103。  
2012 『千年追憶：雲南壯族歷史表述中的儂智高』桂林：廣西師範大學出版社。  
2013 「儂與農：從姓氏變化看靖西壯族的族群認同」『廣西民族研究』2013年第2期：73-79。
- 麥 思傑  
2009 「地域經濟與羈縻制度——宋代廣西左右江地區羈縻制度研究」『廣西民族研究』2009年第1期：96-104。
- 莫 家仁  
2000 「儂智高：沸沸揚揚的千年議題」『廣西民族研究』2000年第2期：89-93。
- 莫 劍  
1948 「關於蠻王儂智高的傳說」『廣西日報（南寧）』1948.9.30。
- 南 躍  
1959 「對儂智高起兵性質的討論」『民族研究』1959年第8期：37-41。
- 農 賢生  
1997 「廣富地區是儂智高抗交反宋的根柢地」『廣南古今』（范 宏貴主編 2005: 499-503）。  
1998 「儂智高的下落辨析」『雲南史志』1998年第4期（范 宏貴主編 2005: 517-519）。
- 儂 鼎升  
2000 「廣南儂土司是儂智高後裔考一和白耀天先生商榷」『廣西民族研究』2000年第3期：109-112。  
2002 「儂智高是壯族英雄——與萬揆一先生商榷」『廣西民族研究』2002年第3期：115-120。
- 儂 芸青  
1999 「壯族英雄儂智高歷史考略」『民族之聲』1999年第6期（范 宏貴主編 2005: 533-536）。
- 覃 乃昌  
2002 「20世紀的壯學研究（下）」『廣西民族研究』2002年第1期：48-55。
- 覃 樹冠  
1949 「儂智高為甚麼反叛」『廣西日報（南寧）』1949.2.28。
- 粟 冠昌  
1963 「廣西土官民族成分初探」『民族團結』1963年2·3月号：39-42。  
1980 「試論儂智高的國籍和他一生的活動」『廣西師範學院學報』1980年第4期：88-96。
- 唐 華清  
2012 「廣西天等“峒信”儂智高廟會文化演變考析」『廣西民族師範學院學報』2012年第2期：4-6。
- 談 琪  
1985 「儂智高的歷史地位應該肯定」『民族研究集刊』1985年第2期（范 宏貴主編 2005: 440-446）。
- 滕 藍花  
2011 「神靈力量與國家意志：以清代廣西境內狄青廟為視角」『廣西民族大學學報』（哲學社會科學版）第33卷第5期：148-153。

塚田 壮族の「民族英雄」儂智高に関する研究の動向と問題点

- 王 克榮・邱 鍾倫  
1961 「略論儂智高起兵の性質」『廣西日報』1961.10.23。
- 韋 文宣  
1982 「評否定儂智高反宋正義性的幾個觀點」『中央民族学院学報』1982 年第 2 期：76-83。
- 徐 松石  
1945 『泰族僮族粵族考』（遠東民族史研究第二冊）。
- 顏 成祿・元 文躍  
1997 「儂智高与儂夏卿」『廣南古今』（范 宏貴主編 2005: 503-504）。
- 尤 中  
1985 『中国西南民族史』第 4 章第 6 節「南天国的建立及其破滅」（190-196 頁），昆明：雲南人民出版社。
- 雲南省人口普查办公室・雲南省統計局編  
2012 『雲南省 2012 年人口普查資料』（上編）北京：中国統計出版社。
- 曾 昭富  
1997 「廣南与儂智高初探」『廣南古今』（范 宏貴主編 2005: 504-508）。
- 張 景寧  
1952 「廣西僮族的簡單介紹」『廣西日報』1952 年 11 月 5 日。
- 張 声震主編  
1997 『壮族通史』，中冊，北京：民族出版社。
- 張 養吾主編  
1993 『〈編纂民族問題五種叢書〉文庫之二 經驗編』北京：中央民族学院出版社。
- 中国科学院民族研究所・廣西少数民族社会歴史調査組編  
1964 『僮族簡史』（初稿）。
- 周 宝珠・陳 振主編  
1985 『簡明宋史』北京：人民出版社。
- 周 維衍  
1980 「廣源州和儂智高」『中国東南亞研究会通訊』1980 年第 1 期（范 宏貴主編 2005: 358-360）。
- 1984 「再談廣源州和儂智高」『印支研究』1984 年第 3 期：28-32, 36。
- 『壮族簡史』編写組編  
1980 『壮族簡史』南寧：廣西人民出版社。

#### 【その他】

Katherine Palmer Kaup

2000 *Creating the Zhuang: Ethnic Politics in China*. London: Lynne Rienner Publishers.